東北の小京都　たなぐら

棚倉町歴史虎ノ巻

立花宗茂

丹羽長重

© 森美夏/棚倉町

東北の小京都　たなぐら

棚倉町歴史虎ノ巻

都々古別三社「御枡廻し」調査報告書Ⅱより転載

棚　倉　町

棚倉の歴史

棚倉は東を阿武隈山地、西を八溝山系に囲まれた自然豊かな街です。町中を西から南へ流れる久慈川は、奥久慈の最高峰である八溝山（標高1022m）を源流とし、その流れは遠く茨城県を通って太平洋へといたっています。

この久慈川沿いを中心として、棚倉には原始・古代より多くの遺跡が見つかっており、古くから人びとが生活していたことがうかがえます。縄文時代には日向前遺跡、高渡遺跡などいくつかの遺跡があり、弥生時代の遺跡は、「棚倉式土器」が出土した崖ノ上遺跡が有名です。また、古墳時代には石棺から人骨や骨鏃が出土した胡麻沢古墳のほか、塚原古墳群、堤古墳群などがあります。

奈良時代になると、遺跡のほかにも文献資料などによって昔の人びとの生活を知ることができるようになってきます。この時期の代表的な遺跡は、大規模な集落跡である松並平遺跡や、東北における古代仏教の一拠点であったと考えられる流廃寺跡があります。また、平安時代中期に編さんされた辞典である『和名類聚抄』によると、この地一帯が「高野郡」という行政区分で呼ばれていたことが分かります。さらに、歴史書である『続日本後紀』や古代における法典集の『延喜式』を紐解くと、この頃に都々古別神社が成立したとされており、当初から非常に高い格を有していました。その勢力は大変大きく、神事などの費用にあてるための領地である神領として、鎌倉時代まで高野郡全域を直接支配するほどでした。

中世になると、山々を中心に修行を重ねる修験道の人びとによる独特な宗教文化が形成されます。修験道は、山岳に登り修行を積むことで呪力を体得することを目的とした神仏混合の民間宗教で、馬場都々古別神社や八槻都々古別神社などが中心となり、東北における一大宗教拠点となっていきました。

一方で政治の面では、白河結城氏が高野郡の地を治めるようになります。白河結城氏は平安時代末の奥州合戦の功績から白河郡を恩賞として賜って以後、鎌倉幕府との関係を密にしながら支配体制を固めていった有力氏族です。その支配は長きに及びましたが、戦国時代になると常陸国（茨城県）より侵攻してきた佐竹氏といった他の有力氏族との間で激しい戦闘が繰り広げられました。この頃、

周辺の山々では中丸館や赤館城、寺山館といった館や山城が次々と築かれました。

徳川幕府が成立し天下泰平の世になると、棚倉の地にも平和が訪れました。最初にこの地を治めた立花宗茂は赤館城や、現在の棚倉小学校にあったとされる大長屋を拠点に政治を行いました。元和 8 年（1622)、常陸国よりやって来た丹羽長重は棚倉城を築城します。築城にあたり長重は、周囲より高い久慈川の河岸段丘に立地する近津明神（馬場都々古別神社）の境内に着目し、現在の社地に遷宮させました。天然の要塞のような地形が城を造るにあたり絶好の地であったというほかに、古代から続く都々古別神社が宗教権威として民衆にまで大きな影響力を持っていたことを利用したとも考えられます。また内藤家の時代、城下町の整備も進み、東西南北の交通が交わる拠点としての地位を確立していきました。

以後、内藤家（ 3 代)、太田家（ 1 代)、越智松平家（ 1 代)、小笠原家(3 代)、井上家（ 2 代)、松井松平家（ 4 代）と続き、慶応 2 年（1866）には白河城主であった阿部正静が棚倉城主となりました。慶応 4 年（1868)、棚倉藩は奥羽越列藩同盟として戊辰戦争に参加するも敗退、棚倉城は落城してしまいます。

明治時代に入り、戦乱後の棚倉は少しずつ復興を遂げていきます。明治 2 年（1869)、正静の叔父にあたる阿部正功が棚倉藩知事となり、それまで藩として棚倉を治めていた権利を朝廷に返す（版籍奉還）と、棚倉の藩としての歴史は幕を下ろしました。新しく樹立された明治政府のもと、明治 4 年（1871)、廃藩置県によって棚倉藩は棚倉県となり、さらに明治18年（1885）には伊野上村と伊野下村が合併し初めて「棚倉町」の名称が生まれました。また、明治30年（1897）には東白川郡という広域行政の郡庁が棚倉に置かれ、以後近隣地域の中心として発展を遂げていきます。一方で文化の面では、旧棚倉藩士の子で唱歌「蛍の光」の作詞を手がけた稲垣千頴や、日本文学界で自然主義というジャンルを確立し棚倉を題材にした作品も残した田山花袋、棚倉出身の日本画家として県内外で功績を残した勝田蕉琴など、棚倉にゆかりのある著名人が活躍しました。

昭和30年（1955)、棚倉町や社川村、高野村、近津山岡組合村の 1 町 3 か村が合併して現在の棚倉町が誕生し、今に至っています。

目　次

棚倉のお城

1　棚倉城跡 …… 6
　棚倉城跡の大ケヤキ …… 8
　阿部正備茶室 …… 8
2　赤館城跡 …… 8
3　寺山館跡 …… 9
4　中丸館跡 ……10

棚倉の神社

1　宇迦神社 ……10
2　馬場都々古別神社 ……11
　都々古別神社本殿 ……12
　長覆輪太刀 ……13
　赤絲威鎧残闕 ……13
　馬場都々古別神社御正体 ……13
　鉾形祭具 ……14
　馬場都々古別神社文書等 ……14
　木造大黒天立像 ……14
　お枡明神の枡送り行事 ……14
3　八槻都々古別神社 ……15
　木造十一面観音立像 ……16
　銅鉢 ……16
　都々古別神社の御田植 ……16
　八槻都々古別神社本殿 ……17
　八槻都々古別神社随身門 ……17
　聖護院道興筆短冊 ……17
　銅製釣燈篭 ……18
　八槻文書 ……18
　八槻都々古別神社の古面 ……18
　八槻都々古別神社の神楽 ……19
　八槻都々古別神社御正体 ……19
　大般若経 ……19
　銅造十一面観音菩薩坐像 ……20
　銅造観音菩薩立像 ……20
　八槻家住宅 ……20
4　愛宕神社 ……21
5　大部屋稲荷神社 ……21
6　秋葉神社 ……21
7　尾滝神社 ……22
8　羽黒神社 ……22
9　藤衣神社 ……23
10　宇迦大明神跡 ……23

棚倉の仏閣

1　山本不動尊 ……24
2　蓮家寺 ……25
　銅鐘 ……25
　蓮家寺山門 ……26
3　長久寺 ……26
　小笠原栄七郎の墓 ……27
4　常隆寺 ……27
5　一色薬師堂 ……28
6　蓮台寺 ……28
　銅造地蔵菩薩立像 ……28

棚倉の石仏・石碑

1　新田義貞の墓 ……29
2　高橋元種の墓 ……29
3　三界万霊塔 ……30
4　伊乃草分地蔵尊 ……30
5　富岡供養塔 ……31

棚倉の名勝

1　八溝山 ……31
2　桜清水 ……32

棚倉の遺跡

1　高渡遺跡 ……33
2　崖ノ上遺跡 ……33
3　塚原古墳群 ……34
4　胡麻沢古墳 ……34
5　堤古墳群 ……34
6　駅路と駅家 ……35
7　松並平遺跡 ……36
8　流廃寺跡 ……36
　流廃寺跡出土金銀象嵌鉄剣 …37
9　鹿子焼窯跡 ……37
10　一里塚 ……38

緑の文化財

棚倉の偉人

歴代の棚倉城主

1　初代城主 丹羽五郎左衛門長重…40
2　２代城主 内藤豊前守信照 ……40
3　３代城主 内藤豊前守信良 ……41
4　４代城主 内藤豊前守弐信 ……41
5　５代城主 太田備中守資晴 ……42
6　６代城主 松平右近将監武元 …42
7　７代城主 小笠原佐渡守長恭 …43
8　８代城主 小笠原佐渡守長堯 …43
9　９代城主 小笠原主殿頭長昌 …44
10　10代城主　井上河内守正甫　…44
11　11代城主　井上河内守正春　…45
12　12代城主　松平周防守康爵　…45
13　13代城主　松平周防守康圭　…46
14　14代城主　松平周防守康泰　…46
15　15代城主　松平周防守康英　…46
16　16代城主　阿部美作守正静　…47

棚倉ゆかりの人びと

1　坂上田村麻呂 ……48
2　源義家 ……48
3　立花左近将監宗茂 ……49
4　玉室宗珀 ……49
5　小川芋銭 ……50
6　佐竹義重 ……51
7　佐竹義宣 ……51
8　松波勘十郎 ……52
9　徳川光圀 ……52
10　斎藤彦麿 ……53
11　十六ささげ隊 ……53
12　板垣退助 ……54
13　西郷頼母（保科近悳） ……54
14　稲垣千頴 ……55
15　阿部正功 ……55
16　折口信夫 ……56
17　田山花袋 ……56
18　勝田蕉琴 ……57
19　聖護院道興 ……58
20　高山彦九郎 ……58
21　有井諸九尼 ……59

年表 ……60
参考文献……64
地図 ……66

棚倉のお城

1 棚倉城跡（棚倉字城跡・国史跡）

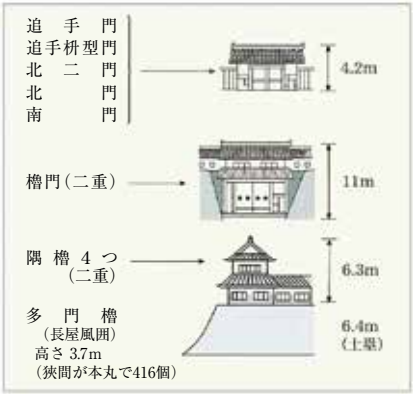
棚倉藩主丹羽長重は寛永元年（1624）、江戸幕府の命を受けて棚倉城を築城することとなりました。築城する場所は、多くの家臣が政務を行えるような大きな城を建設するのに充分な面積が得られ、また城の西側が急な丘になっており外敵から城を守るのに都合の良いこの地が選ばれました。その際、ここに建っていた近津明神（馬場都々古別神社）を現在の馬場に遷し、同２年（1625）より　築城を始めました。

以後、慶応４年（1868）に戊辰戦争の兵火で落城するまで、丹羽家、内藤家、太田家、越智松平家、小笠原家、井上家、松井松平家、阿部家といった諸大名が居城し、城主の替わること８家16代（244年間）に及びました。言い伝えでは、お堀に住む大亀が水面に浮かぶと決まってお殿様が他国へ国替えされたということから、別名「亀ヶ城」とも言われています。

棚倉城は御殿のある本丸と、それを囲む二ノ丸・三ノ丸から構成される輪郭式と呼ばれる構造のお城です。本丸の四方は、高さ約6.4ｍにも及ぶ巨大な土塁で囲まれ、その上には多門櫓と呼ばれる長大な建物や隅櫓（城の角に配置される櫓）を建て、厳重な防御を誇りました。また、本丸を守るも

う一つの要である堀は、幅約36m、本丸曲輪面から水面までの高さ約7.3m、水深は約3.8mと記録にあり、非常に規模が大きいものです。

門は、正門にあたる追手門や本丸に入る追手枡形門、新町側の北門、北二門などがありました。また長久寺の山門は、棚倉城の南門を宝永4年（1707）に当時の城主であった太田資晴が寄進したものと伝えられており、当時の城をうかがえる数少ない建物と言えます。



現在、本丸平場を囲む土塁の大部分と堀が残っており、土塁の上には南北朝時代の供養塔や棚倉城規模碑などがあります。また、城の南西部に残されている外堀跡には野面積みの石垣が約160mに渡って現存しており、昔をしのばせています。

棚倉城の名称いろいろ

丹羽長重は、棚倉城が完成しないまま白河へ移りました。城壁を白壁に仕上げられず荒土のままであったことから、当時は『新土城』と呼ばれていました。また、一説に棚倉の地名の起こりとされる「種倉」から詩人・墨客（書や絵を描く人）などはこれをもじり『穀城』としゃれて呼んでいたそうです。奥州一宮近津明神の旧社地の跡地に建てたので、『近津城』とも名づけられていました。

棚倉城跡の大ケヤキ（県指定天然記念物）

このケヤキは、棚倉城を築城する以前にこの地にあった、近津明神（馬場都々古別神社）の御神木だったとされる大樹です。棚倉藩主丹羽長重は、その形があまりにも優れていたため、そのまま残されたと伝えられています。

樹齢約600年、樹高約32m、幹回りは最大で10mにも及びます。また、二股に分かれた幹の根元には大きなコブがあり、長い年月を経てきた息吹を感じさせます。県内ではこれほど巨大なケヤキは稀で、県の指定天然記念物や緑の文化財（別項参照）に登録されています。

阿部正備茶室（町指定有形文化財）

棚倉城跡のすぐそばにあるこの茶室は、元白河藩主で、16代棚倉城主阿部正静と共に棚倉城に住んだといわれる阿部正備が愛用したものです。

広さ４畳半の片隅に水屋（茶事の用意を整えたり、使用後に茶器を洗ったりする場所）を設けた茶室で、特に周囲を竪羽目と呼ばれる、板を縦方向に並べる貼り方で作られた壁を採用した数少ない建築例とされています。

明治維新後に、古町地区の商家が譲り受けて自宅の屋敷に離れとして使われていましたが、現在は移築復元され町民の憩いの場として利用されています。

2　赤館城跡（棚倉字風呂ヶ沢）

赤館城跡は、町市街地北端の赤館山の山頂に位置する山城です。眼下には棚倉

町の市街地が広がり、遠くは久慈川沿いの町並が眺望できます。

古い記録によると、建武年間（1334～38）にはすでに赤館城が築かれていたことが分かります。築城当初の城主は不明ですが、文明年間（1469～87）には伊達氏の家臣赤館源七郎が在城しており、この頃から地域における有力な拠点として機能していたことがうかがえます。また、戦国時代には伊達氏や白河結城氏、芦名氏、佐竹氏による領地争いにより城主が目まぐるしく替わりました。慶長７年（1602）、城をおさえていた佐竹義宣が出羽国秋田（秋田県）に移ると、同11年(1606)に立花宗茂が入封し、赤館城にて棚倉藩の初代藩主となりました。後に棚倉城が築城され政治の拠点が平野部へと移ると、赤館城はその役目を終え、廃城となりました。

発掘調査では、長大な土塁や、最大で幅約10m、深さ約４mにも及ぶ堀が巡っていることが明らかになりました。

また、敷地内には紫衣事件で棚倉に配流された京都大徳寺の住職玉室宗珀が住まった庵跡の碑があります（別項「玉室宗珀」「小川芋銭」参照）。

3　寺山館跡（流字豊山）

流字豊山の中腹に数多くの平坦面（曲輪）や大規模な堀、土塁を構えた山城跡です。地名から別名蛇頭館とも言います。築城時期は不明ですが、白河結城氏によって築かれたものと言われており、元亀年間（1570～73）には白河結城氏の家臣深谷伊豆守治行と斑目能登守の両将がこの城を預かり、以

後約10年間治めていたとあります。永禄４年（1561）頃、常陸国より北上してきた佐竹氏との激しい戦闘の末に城を奪取され、以後は白河結城氏の要である赤館城を攻める前線基地としての役割を果たしました。

4　中丸館跡（板橋字日照田・福井字中丸）

中丸館は平地に築かれた室町時代の館跡です。「館」は、普段の領主の住まいのことで、戦時になると山城が使われました。文政元年（1818）に書かれた『白河古事考』によれば、田村氏の一族の仲丸左京太夫や白河結城氏の配下上遠野美濃守盛秀が居城したとあります。

館跡の内部は、空堀により一番平・二番平と呼ばれる、大きく２つの区画（曲輪）に分かれており、城主の住まいとなる建物があったと考えられます。また、周囲には空堀や土塁が残り、南西端には櫓の跡もみられます。

棚倉の神社

1　宇迦神社（棚倉字風呂ヶ沢）

伝説によるとその昔、白河国造である塩伊乃己自直命がこの地を拓くに当たり、穀物の神である倉稲魂命を祀ったことが起源とされています。以来、棚倉の鎮守として人々に親しまれてきました。

社殿の創建は神亀年間（724～729）、旧飯野

村（上台・玉野・福井地区）に宇迦明神を祀ったものが最初と伝えられており、のちに初代棚倉藩主立花宗茂により慶長年間（1596～1615）に現在の場所に遷宮したと言われています。元禄14年（1701）、4代棚倉城主内藤弐信が現在の社殿を再建しました。

毎年10月には五穀豊穣を願い、秋の例大祭が開催されています。町内を大屋台（山車）が繰り出し、囃子太鼓などの興業が随所で行われます。

なお、最初の社地とされている旧飯野村には、「宇迦大神発祥の地」碑が建立されています。

2　馬場都々古別神社（棚倉字馬場）

都々古別三社または近津三社（馬場都々古別神社、八槻都々古別神社、下野宮近津神社）と呼ばれているうちの上宮で、もともとは棚倉城の本丸の位置に鎮座していました。寛永元年（1624）に棚倉藩主丹羽長重が棚倉城を築城するに際して、神社を現在地に遷しました。

この神社は、かつて日本武尊が、東北鎮撫の折に表郷（白河市表郷地区）の建鉾山に鉾を祀ったことが始まりとされており、のちに大同2年（807)に坂上田村麻呂が現在の棚倉城跡に遷宮したと伝えられています。

祭神は、農業の神である味耜高彦根命と日本武尊で、言い伝えによると寛治元年（1087）、源義家（別項参照）が東北における戦乱を平定した後に鎧や太刀を奉納したことから、武神としての性格もあったとされています。

馬場都々古別神社は、東北の神社の中でも最高位の格式をもつ陸奥一宮として古くから信仰を集めました。承和7年（840）に成立した国の歴史書である『日

本後紀』に初めて記述がみられ、延長5年（927）には全国の神社の格を定めた『延喜式神名帳』にも記載されました。明治6年（1873）に新政府によって新たに作られた制度でも、全国で約30か所しかない国幣中社に列せられるなど、歴史を通じて格式高い神社であり続けました。

また、江戸時代には上津寺という、神宮寺がありました。明治時代初めの廃仏毀釈によって廃絶してしまいました。

都々古別神社本殿（国指定重要文化財）

馬場都々古別神社の本殿は、東北地方における数少ない江戸時代以前の本殿建築です。文禄3年（1594）、豊臣秀吉の命を受けた佐竹義宣が社殿を造営し、その後棚倉藩主丹羽長重が棚倉城を築造するにあたって寛永2年（1625）に現在の社地に遷されました。

本殿は屋根や壁、軒廻りなどで後世による改変が行われている一方で、造営当時の建築部材も現在まで数多く残っていることが明らかになっています。例えば、本殿から前に張り出す庇屋根を支える海老虹梁と呼ばれる梁を見てみましょう。江戸時代に入ると、本殿における海老虹梁は一般的に大きくカーブしたような形状になり、その姿から部材の名称の由来も起こりました。一方で、馬場都々古別神社本殿の海老虹梁は大きく曲がらずにほぼ水平な形をしています。これは、江戸時代以前の古い本殿建築の特徴とされています。ほかにも、大きく傾斜した屋根やそれを支える反った垂木、豕叉首組と呼ばれる社寺建築特有の妻飾りといった、江戸時代以前の古い建築部材や技法が見られます。

このように、本殿は江戸時代へと移り変わる直前の時期においてどのような建築技法があったのかを知ることのできる貴重な文化財なのです。

長覆輪太刀（国指定重要文化財）

馬場都々古別神社に伝わる、鎌倉時代に作られたとされる太刀です。長さが95.5cmと非常に長いのが特徴で、実用品としてではなく、奉納用に作られたものと考えられます。

長覆輪とは、鞘全体に覆輪と呼ばれる金メッキなどの金属で縁取りを加えたものを指します。また、取手の部分にあたる柄には萩やスズメが、また側板には鳩と枝葉がそれぞれ毛彫されています。

赤絲威鎧残闕（国指定重要文化財）

馬場都々古別神社に伝わる、鎌倉時代の作とされる大鎧の一部です。

大鎧は、馬上で弓を射るために作られた非常に重厚な鎧のことで、兜を含めると重さ25kg以上にもなります。鎧は札と呼ばれる革や鉄で作られた小さな板を横につないだ札板を作り、それをさらに上下につないだもので構成されています。それぞれの札板をつなぐことを威といい、すなわち赤絲威とは赤い緒を使って札板をつないでいることを表しています。

この鎧の特徴は、複数の種類の威や、大きさの合わない甲冑部材が使われている点です。このことは大鎧が長期間にわたり、修理や改造を繰り返して使われたことを示しています。おそらく、祭礼で使われる神宝として奉納されたものでしょう。

馬場都々古別神社御正体（県指定重要文化財）

御正体とは、神社における神体である鏡に仏の像を表したもので、平安時代以降に普及した、仏が日本の神の姿で民の前に現れるという神仏習合の考えによっ

て作られたものです。馬場都々古別神社には面径約15～45cm程の４面の御正体が伝わっており、鎌倉～室町時代にかけての作とされています。

鉾形祭具（県指定重要文化財）

馬場都々古別神社の祭礼などに使用された、全長約80～188cmの鉾でいずれも室町時代の作です。銅製の刃部の下の円盤状の部分に彫りこまれた銘文からは、応永７年（1400）の年号や人名を読み取ることができ、これらの鉾の寄進に関する情報とみられます。

馬場都々古別神社文書等（県指定重要文化財）

馬場都々古別神社に伝わる、中世末期～江戸時代末にわたって書かれた古文書22点です。元亀２年（1571）に書き改められた神社の由来についての縁起や、文禄３年（1594）の佐竹義宣による社殿の造営に関する文書、寛永元年（1624）に棚倉藩主丹羽長重が自身の領地を神社に寄進した内容の文書などがあります。

木造大黒天立像（町指定有形文化財）

馬場都々古別神社に伝わる大黒天像です。大黒天は、本来は仏の教えを大切に守るための武神でしたが、時代が下るとともに福神の性格が色濃くなり、福々しい顔つきの像が一般的になりました。この像は室町時代の作とされており、怒ったような顔つきや右足をやや踏み出した体勢をとっていることから、武神の性格が強かった頃の表現が見て取れます。

お枡明神の枡送り行事（県指定重要無形民俗文化財）

お枡明神の枡送りは、棚倉町福井・玉野・一色、浅川町蓑輪の４地区で行われるお祭りです。内容は、３年ごとに当番の地区を決め、ご神体とされる枡を前回の当番であった地区から遷すというものです。ご神体の枡は遷されるつど、地区

内の神社境内にある高床式の御仮屋と呼ばれる建物の中に納められます。

この行事は農作物の豊作を願って行われるもので、古い農耕儀礼の形を残しているといわれています。この行事がいつから始まったかは不明ですが、元禄年間（1688～1704）には同様の行事が行われていたことが記録から分かります。かつては近隣49か村で行われていた大規模な行事であったそうです。

3　八槻都々古別神社（八槻字大宮）

都々古別三社または近津三社（馬場都々古別神社、八槻都々古別神社、下野宮近津神社）と呼ばれているうちの中宮です。

日本武尊が八溝山で東国の大将を討った際、守護としていた３人の神々が表郷（白河市表郷地区）の建鉾山より箭（矢）を放ち、その箭（矢）が着いた場所を箭津幾（矢着）として、都々古別神社を創建したのがはじまりと伝えられています。

祭神は農業の神である味耜高彦根命と日本武尊で、馬場都々古別神社と同じく、中世には後者による武神としての性格を強くしていったとされています。

八槻都々古別神社が初めて歴史書に表れるのは、承和７年（840）に成立した『日本後紀』で、延長５年（927）には全国の神社の格を定めた『延喜式神名帳』にも記載されました。明治６年（1873）に新政府によって新たに作られた制度では郷社とされたため、神社・氏子共にこれに抗議し、国幣中社に列せられるように歎願した結果、同18年（1885）になって許可されました。

中世における八槻都々古別神社は、修験道と呼ばれる、厳しい山々や霊地で苦行を積むことで霊験のある不思議な力を身につけることを目的とした宗教組織の拠点となりました。八槻都々古別神社の宮司であり、同時に修験道のリーダー的存在でもあった別当大善院は、聖地とされた熊野（和歌山県）参詣の際に信者を引率する先達という役職を務め、その勢力は依上保（大子町）やいわきなど非常

に広範囲に及びました。

また、道路を挟んで隣に位置する如意輪寺はかつて八槻都々古別神社の別当が管理していた、神宮寺と呼ばれる付属寺院であったとされています。

木造十一面観音立像（国認定重要美術品）

八槻都々古別神社に伝来する、天福２年（1234）作の仏像です。高さは約73㎝で、両腕を欠損しており部分的な着色も見られます。頭部から台座までを一本の材から彫りだした一木造りが特徴です。

台座の裏側には、墨によって造立に関する経緯が記されています。それによるとこの像は、八溝山の観音堂で300日にも及ぶ参籠修行を行った僧成弁によって造られたもので、その姿は大和国（奈良県）の長谷寺本尊に倣ったとされています。ちなみに、長谷寺とは真言宗豊山派の総本山とされる寺院で、現在残る本尊の十一面観音立像は天文７年（1538）の作で高さ10m以上にもなる巨大なものです。

銅鉢（国指定重要文化財）

銅鉢は、仏に供える洗米を受けるための仏具です。八槻都々古別神社には口径約28㎝、高さ約15㎝を測る朝顔形の銅鉢が４個伝えられています。

その中の２個には側面に銘文が刻まれており、鉢が応永18年（1411）に当時棚倉一帯を支配していた白河結城氏の５代目の当主である満朝によって寄進されたことが分かります。

都々古別神社の御田植（国指定重要無形民俗文化財）

御田植は毎年旧暦正月６日に、古くから都々古別神社に奉仕する社家（神社の神職を代々受け継いできた家）の人々が中心になり、八槻都々古別神社の拝殿で行われる、その年の豊作を祈る芸能です。せりふと簡単な所作で構成され、稲作の作業過程を模擬的に演じます。

この行事がいつ始まったのかは不明ですが、演じられる動きは能や狂言の所作に通じるものがあり、鎌倉時代以降には成立していた可能性があるといいます。

八槻都々古別神社本殿（県指定重要文化財）

享保年間（1716～1736）に造営されたと考えられています。形式は三間社流造を基調としながらも、奥行きを通例より長くとるといった独創性が見られ、県内の神社建築の中でも江戸時代中期を代表する貴重な建造物です。

八槻都々古別神社随身門（県指定重要文化財）

本殿と同様に、享保年間（1716～1736）の建築であると考えられています。組物の周辺に華やかな彫刻が施されていることが特徴で、本殿のつくりに通じるものがあります。

聖護院道興筆短冊（県指定重要文化財）

八槻都々古別神社はかつて八槻修験と呼ばれる修験道の拠点として機能していましたが、その教えは本山派という一派に属していました。その本山派の総本山である、京都の聖護院の住職を務めたのが道興でした（別項「聖護院道興」参照）。

文明18年（1486）に諸国を巡る旅に出た道興は、その途中で八槻都々古別神社の別当の住まいを訪ねて数日滞在しました。この時に詠んだ歌「梓弓」を書いた短冊が今に伝えられています。

「あづさ弓　やつきの里の　桜がり　花にひかれて　をくる春かな」

銅製釣燈籠（県指定重要文化財）

八槻都々古別神社の釣燈籠はかつて軒先や本殿の中で、あるいは燃灯供養と呼ばれる儀式の中で使われたもので、２基が伝えられています。底部には「近津宮寄進別当良賢文亀二年辛酉霜月廿一日」の刻銘があり、文亀２年（1502）に、近津宮（八槻都々古別神社）の宮司と別当を務めていた良賢によって寄進されたことが分かります。

八槻文書（県指定重要文化財）

八槻都々古別神社の運営などに関する古文書群で、室町～江戸時代に至る年代の242点が県指定重要文化財となっています。中には、天正18年（1590）に豊臣秀吉から八槻別当に宛てられた公式文書である朱印状や、徳川光圀による別当と贈答のやりとりの礼状といった、歴史上の有名人にまつわる書状等も含まれています。当時の棚倉の政治や文化といった人びとの営みを今に伝える貴重な歴史資料として、今後の研究や活用が期待されます。

八槻都々古別神社の古面（県指定有形民俗文化財）

八槻都々古別神社には、古面15枚と壁に掛ける信仰用の木彫の鬼面２枚が伝わっており、古代の芸能を語る貴重な資料となっています。

面について、明治時代初頭に記された『己号近津神社寶蔵古面図』が同じく神社に伝わっていますが、既にこの時はどのような芸能などに使われていたのかは不明となっていたようです。おそらく、これらの面をつけた踊り子たちが、豊作祈願といった祭りの際に社殿で舞を舞ったのでしょう。

八槻都々古別神社の神楽（県指定重要無形民俗文化財）

神楽とは神に奉納する歌舞のことで、八槻都々古別神社に伝わる神楽は「七座の神楽」と「太々神楽」が伝えられています。七座の神楽は、毎年旧暦11月１日の霜月大祭に拝殿で演じられる神楽です。七座の名の通り７種類の神楽で構成されますが、すべてを演ずるのは60年ごとの神輿巡幸の時とされています。太々神楽は、天地開闢や玉矛舞といった神話を題材とした36もの演目があります。

八槻都々古別神社御正体（県指定重要文化財）

懸仏とも呼ばれ、仏像や神像を円板状にあらわしており、神社や寺の内陣に懸けて礼拝したものです。平安時代に始まった、仏が日本の神の姿で民の前に現れるという神仏習合の考えによりつくられました。この御正体は室町時代のもので、「銅造十一面観音懸仏」「銅造十一面観音三尊懸仏」「銅造十一面観音三尊懸仏」の３面が伝わっています。いずれも直径約１ｍという大型のものです。

大般若経（県指定重要文化財）

大般若経とは、仏教において達成されるものを記した多数の般若経を集成したもの、全600巻で構成されます。古く奈良時代より日本に伝わったとされており、以後日本の仏教において除災招福のため盛んに読経や写経されました。

八槻都々古別神社に伝わる大般若経は、天文６年（1537）～９年（1540）に成立したと考えられており、経典600巻が現存しています。驚くことにこの大般若経の書写には中世白川郡のみならず、九州や四国といった遠国からやってきた僧も関わっており、いかに八槻都々古別神社が影響力を持っていたのかがうかがえます。

銅造十一面観音菩薩坐像（町指定有形文化財）

八槻都々古別神社に伝わる、高さ19㎝程の小柄な仏像です。鎌倉時代の作とされています。

この像は銅製で、頭から足まで、腕や台座など各パーツをそれぞれ制作したのち接合するという構造で作られています。また作風も、例えば衣服のひだや皺の表現である衣文は浅く整っており、全体を通して穏やかな印象を与えています。

銅造観音菩薩立像（町指定有形文化財）

八槻都々古別神社に伝わる、南北朝時代（14世紀後半頃）の作とされる仏像です。この仏像は、信濃国（長野県）の善光寺の本尊である阿弥陀三尊をモデルとしており、その中の脇侍菩薩の１つにあたります。つまり、中心となる仏（中尊）の脇に控える観音菩薩であり、中尊ともう１つの脇侍である勢至菩薩を失った状態で今に至っています。

目尻が吊り上がり鼻筋の通った顔からは、別に伝わる銅造十一面観音菩薩坐像と同じく、見る人を非常に穏やかな気持ちにさせる仏像です。

八槻家住宅（八槻字大宮・県指定重要文化財）

代々八槻都々古別神社の宮司と大善院の別当職を務めてきた八槻家の住まいです。周囲には土塁や堀が残る中世の屋敷（館）の跡が残り、古くから八槻家がこの場所を拠点としていたことがうかがえます。

八槻家は表門や主屋、書院棟や土蔵などによって構成されています。中でも敷地の中央にある、日常生活の場である主屋と客人を迎えるための書院棟は、それぞれ江戸時代中期に建てられた貴重な建物です。

この建物の中で主屋及び書院棟、表門、脇門が県指定重要文化財となりました。

4 愛宕神社（関口字愛宕平）

元和６年（1620）、初代棚倉藩主立花宗茂が筑後国柳河藩（福岡県）へ国替えになるとき、一家の重臣であった十時連貞に命じて造営させた神社とされています。

御神体は、連貞が宗茂より賜ったとされる馬印です。馬印とは、合戦の際に大将の馬のそばに立ててその所在を示すもので、これは城下で警察権・裁判権を担う検断職を務めた井上家に伝わっているとされています。

5 大部屋稲荷神社（棚倉字南町）

城跡の南、宮下交差点付近の大銀杏の横に稲荷神社があります。

このお社が建てられた由来として、以下のような話が伝わっています。12代棚倉城主松平康爵の代、松平家の江戸屋敷に勤めていた岩藤と尾ノ上という２人の奥女中が、康爵からの寵愛をめぐって争いになり、両者共に亡くなってしまうという事件がおきました。その後、康爵の寝所には毎夜亡霊が出るようになり、困り果てた家臣一同がお稲荷様を建てて２人の霊を慰めたそうです。「大部屋」は、岩藤と尾ノ上が務めていた屋敷の中の場所を指しています。この話の元になった事件は、実際には享保９年（1724）に起こっています。

6 秋葉神社（棚倉字北町）

秋葉神社は、静岡県秋葉山の秋葉大権現の御分霊を祀ったものです。秋葉大権現は防火の神様として江戸時代に信仰を集め、全国に同名の神社が多数あります。

棚倉城下は大火が多く、寛文12年（1672）の長楽寺大火から昭和15年

（1940）の棚倉大火まで、数度にわたって町が焼け野原になりました。そういった背景の中で、少しでも火事による悲劇をなくそうという人びとの思いが秋葉神社の建立につながったということは想像に難くありません。

また、神社境内にそびえる大ケヤキは緑の文化財（別項参照）に登録されています。

7 尾滝神社（花園字大明神）

尾滝神社は、花園地区の尾滝山にある神社で、平安時代末に源義経の部下として活躍した武将鈴木重家を祀った神社です。

この神社の創建由来について、以下の話が伝わっています。文治５年（1189）、義経と兄である源頼朝の確執が増す中で、鎌倉幕府にとらえられてしまった重家は脱出に成功し、奥州平泉へ向かっていた義経を頼って東北へ長い旅に出発しました。途中で棚倉に辿りついた重家は、しばらくこの地に潜伏し、自身の持っていた石仏を尾滝山に祀って再び旅立ったのでした。なお、重家が棚倉を去る際に仏像を預けたという農民の彦六は重家の遺志を受け継ぎ、代々鈴木姓を名乗るようになったといいます。

一説に、重家はもともと紀伊国（和歌山県）熊野神社の神官であり、同地には花園という地名があったので、後世に尾滝神社を「花園大明神」と呼ぶようになり、現在の地名になったといわれています。

また、社地の花園高野槇は町指定文化財、緑の文化財（別項参照）に登録されています。

8 羽黒神社（堤字羽黒東）

羽黒神社は、山形県の出羽三山に鎮座する羽黒神社の御分霊を祀った神社です。

修験道の霊場である出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）は東日本一帯で信仰を集め、信者は講と呼ばれる信仰集団を組織して行事を行いました。堤地区の羽黒神社も、この地で活動した講の拠点として建てられたものと考えられています。

造営年代は定かではありませんが、部材の彫刻等から推定すると、江戸初期前後と思われます。また、柱には登り竜が浮彫りにされるなど優れた彫刻を見ることができます。

また、参道入り口にそびえるしだれザクラは、緑の文化財（別項参照）に登録されています。

9 藤衣神社（山際字屋敷前）

杉の古木を覆い尽くす満開の藤の花が、まるで紫色の衣を着た様に見えることから、地区の人から藤衣神社・藤衣様と呼ばれ親しまれています。一説に、和歌山県の熊野三社の御分霊を祀ったものだと言われています。

言い伝えでは、藤の花が開かない年は農作物が不作といわれ、昔の人びとは藤の開花状況によってその年の農事経営の方針を立てたといわれています。

10 宇迦大明神跡（福井字愛宕平）

現在の宇迦神社社地へ遷座される前（神亀元年（724）から室町時代末期まで）に、宇迦大明神が祀られていたとされる場所で、現在は記念碑が建てられています。

ところで、宇迦神社の神は白蛇の姿をしているといわれています。その昔、１人の巡礼僧が福井地区にやって来た際、彼は社川の水を飲み旅の疲れからうたた寝をしてしま

いますが、その際に一匹の蛇が夢枕に立ち、自らをお祀りするようにと宣託があったのでした。それ以後、福井地区の村の人びとの夢にもその白蛇が現れるようになり、彼らは言いつけに従って白蛇をこの土地の神様として祀り大切に守り続けたといいます。

棚倉の仏閣

1 山本不動尊（北山本字小檜沢）

山本不動尊は山本地区の最も西側の山筋に位置するお寺です。付近は自然公園に指定されており、あたかも秘境に迷い込んだかのような荘厳な風景を楽しむことができます。

山本不動尊の縁起として、以下のような話が伝わっています。大同２年（807）、真言宗を開いたことで有名な弘法大師（空海）が湯殿山（山形県）に新しい寺院を創建すべく、東北行脚の旅に出発します。その途中、八溝山に住む悪い鬼を退治するために山本の地において巨石に岩窟を掘り、護摩壇と呼ばれる儀式の場を築きました。大師の修行や儀式により悪鬼は退散し、人びとは平穏な暮らしを得たとされています。山本不動尊はこうした平和がいつまでも続くようにと願い建立されたといわれています。

寺の一番奥にある岩窟には、鉄や木で作られた剣がところせましと立ち並んでいます。これは、仏教において悪魔を打ち払う不動明王が手にする剣と同じ形のもので、多くの人びとがその御利益を慕って寄進したものです。

山本不動尊は棚倉藩主からも厚い保護を受けています、例えば、12代棚倉城主松平康爵が開運祈願のために寄進した石灯籠が今も残されています。

2　蓮家寺（棚倉字新町）

慶長7年（1602）に佐竹氏が出羽国秋田（秋田県）に移った後、棚倉は幕府が直接支配する事になりました。蓮家寺は、幕府の役人としてこの地の支配をまかされた彦坂小刑部元正の家臣、蓮池主水と糟屋弥兵衛が阿弥陀寺を建立し、まもなく開創の施主両名の名をとり蓮家寺としました。

のちに2代棚倉城主内藤信照による手厚い保護もあり、慶安元年（1648）には徳川幕府3代将軍徳川家光より、寺の財産収入を保証する御朱印状を拝受するなど、城下を代表する寺院として繁栄しました。

寛文12年（1672）の棚倉大火で全焼してしまいますが、優れた霊験を数多く成した伝説的な僧として知られる祐天が幕府将軍の命で派遣され、復興に尽力しました。しかしその後も度重なる火災に見舞われており、現在見ることのできる御堂は明治～大正時代にかけて再興されたものです。

蓮家寺の境内には、内藤信照が寄進したという銅鐘や内藤家一門の墓所、戊辰戦争で亡くなった棚倉藩士らを弔った弔魂之碑などがあります。

また、境内の大ケヤキは緑の文化財（別項参照）に登録されています。

銅鐘（国認定重要美術品）

蓮家寺の銅鐘は、正保4年（1647）に2代棚倉城主内藤信照が寄進したものです。毎日巳の刻（午前11時）に、念仏を唱える勤行を終える合図として鳴らされました。また、城下や農民の人びとは、鐘の音を聞いて昼食の時間としていたといい、棚倉の「時の鐘」のような役割といえるでしょう。

蓮家寺山門（町指定有形文化財）

彫刻が美しい 2 層の山門です。安永 4 年（1775）に造られた当初は他の 2 つの門があり、蓮家寺三門といいましたが、明治23年（1890）の火災で今の山門のみが残りました。また、建立時は紅殻によって赤く塗られた姿であったらしく、今も所々に色が残っています。

正面にある「大泉山」の扁額は、隣国の水戸藩に仕えた著名な書家である関其寧によるものです。

3　長久寺（花園字沢目）

長久寺は宝永 4 年（1707）、5 代棚倉城主太田資晴が経済的な後ろ盾となって、身延山久遠寺（山梨県）より遠沾日亨を初代住職として招き創建されました。

山門は、太田資晴が棚倉城二ノ丸にあった南門を寄進・移築したもので、現存する棚倉城唯一の建造物です。また、山門の両側に配置されている金剛力士像はかつて馬場都々古別神社にあったものです。明治時代初め、新政府によって行われた仏教排斥運動である廃仏毀釈を憂いた町の人びとが、密かに長久寺へ運び守ったという逸話が残されています。同じように、かつて馬場都々古別神社の付属寺院であった上津寺の本尊であった仏像も伝わっています。

境内には、小笠原騒動に関わった小笠原栄七郎の墓（別項参照）や、明治～昭和期に活躍した小説家である田山花袋（別項参照）が呼んだ歌に関する記念碑などがあります。

小笠原栄七郎の墓

8代棚倉城主小笠原長堯の時代、長堯の弟である小笠原栄七郎が長堯を失脚させようと企てた事件を、「小笠原騒動」といいます。

栄七郎は、家老である来川仁右衛門にそそのかされて長堯の代わり小笠原家の当主になるという野心にとりつかれ、日夜問わず仏の前で一心不乱に兄の長堯を呪い殺そうと祈り続けました。しかしこの悪事は長堯の知るところとなり、失敗に終わりました。

この事件後、仁右衛門らは棚倉から追放となりましたが、栄七郎は兄の恩情により罪に問われませんでしたが、結局良心の呵責に耐えかねてかついには気がふれてしまい、哀れな最期を遂げてしまったと伝えられています。

栄七郎の墓は、長久寺境内に建てられています。

4 常隆寺（流字豊都）

常隆寺は天平9年（737）、奈良時代に民間レベルで仏教布教を行った僧として有名な行基によって八溝山のふもとにて建立されたとされ、文明元年（1469）に久慈川の田園地帯を一望することができる現在地に移転したといわれています。

このお寺には、開祖である行基の作とされる十一面観音菩薩が伝わっています。別名入沢観音ともいい、長く風雨にさらされたらしく彫りが不明瞭になってしまった仏像ですが、かなり古いもののようです。また、この像が老人に化けて夜な夜な酒を買いにきたという不思議な伝説が伝わっています。

また、門前には「逆さ桜」とよばれる桜の木があり、様々な伝説が残っています。その中の1つに、源義家（別項参照）がこの地で戦いを行った際、騎馬が深い田んぼのぬかるみに踏み込まないように、目印として桜の枝の鞭を逆さまに差したところ、根を張って葉や花をつけたといわれています。

5 一色薬師堂（一色字カナイ神）

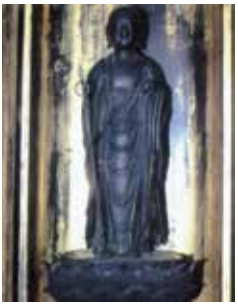
一色地区の集落の田園地帯の中、鬱蒼とした林の中にあるお堂です。

一色薬師堂は、鎌倉時代に中国からもたらせた禅宗様という建築様式を基調とした建物で、特に内外部に見られる華麗な装飾彫刻が特徴です。建築細部は八槻都々古別神社の本殿や拝殿によく似通っていますが、少し年代が下る18世紀後期の特徴を示しているとされ、規模や形式がよく整った、江戸時代後期の貴重な仏堂です。

6 蓮台寺（棚倉字古町）

蓮台寺は、寛正６年（1465）に常陸国久慈郡町付村（茨城県大子町大字町付）にある慈雲寺の住職尊瑜僧都らによって創建されたと伝えられています。城下での度重なる大火により資料がほとんどないため、詳しいいわれは不明です。

銅造地蔵菩薩立像（町指定有形文化財）



蓮台寺に伝来する仏像で、高さ約20㎝程の小柄な像です。背面には応安２年（1369）の銘文があり、南北朝時代の作であることが分かります。

愛らしい表情や、下へと流れるように表現された衣の彫りは、見る人に穏やかな印象を与えます。

棚倉の石仏・石碑

1 新田義貞の墓（富岡字寺ノ前）

富岡地区にある蔵光寺の境内に、「源光院殿正四位上前近衛中将源朝臣新田大守義貞大居士」という、極めて長い戒名を刻んだ石碑があります。南北朝時代の武将で鎌倉幕府を倒して名をあげた新田義貞の墓といわれています。

義貞が延元３年（1338）に足利尊氏（のちの室町幕府創始者）に敗れて戦死した際、彼の妻であった勾当内侍がその首を守り本尊の地蔵菩薩を携えて東北地方に逃げのび、棚倉の地にたどりつきました。長旅の疲れによって病気となってしまった内侍は、富岡の地で療養に努め全快します。その後地域の人々の助けでこの地に義貞の墓と地蔵菩薩を安置するお堂を築き、自ら尼となって日夜義貞の御霊を弔ったと伝わっています。

2 高橋元種の墓（流字豊山）

流地区豊山の墓地には、東山の五輪塔と呼ばれる、人の背丈より高くそびえるひときわ大きな五輪塔が佇んでいます。江戸時代の初めに棚倉で最期を過ごした武将、高橋元種の墓です。

元種は、もともと日向国延岡（宮崎県）の戦国武将で豊臣秀吉の九州攻めの際に降伏して付き従い、のちに朝鮮出兵などで活躍しました。関ヶ原の戦いでは徳川家康率いる東軍に味方し、江戸時代に入ってからも引き続き延岡を支配しました。また、延岡城の築城や城下町建設にも尽力するなど、延岡藩の基礎づくりに大きな業績をあげました。

それまで順風満帆に歩んできた元種でしたが、慶長18年（1613）に突如幕府から藩主を辞めさせられ、領地も没収されてしまいます。理由は、罪人として幕府から追われていた水間勘兵衛を匿ったというものでした。棚倉藩にお預けとなった元種は長男の左京と共に延岡を離れ、遠路はるばる棚倉にやって来たのです。

棚倉での元種の生活を語る資料は残念ながらありませんが、同19年（1614）に44歳で没したとあります。また、息子の左京は初代棚倉藩主立花宗茂や棚倉藩主丹羽長重に仕え、のちの子孫も代々丹羽家に仕えたといわれています。

3 三界万霊塔（大梅字段河内）

元治元年（1864）、水戸藩の過激な尊王攘夷運動を掲げる一派である天狗党が反乱を起こし常陸国（茨城県）や下野国（栃木県）を荒らしまわった、いわゆる天狗党の乱が勃発しました。

この争乱は結局、幕府や水戸藩などによって鎮圧されましたが、その際に天狗党の残党が八溝山へ逃げ込みました。飢えや寒さに耐えられず下山して降伏した彼らでしたが、幕府の命令によって多くが捕まり、処刑されてしまいます。

大梅地区には、藩内で捕まって処刑された天狗党の志士たちを供養するため、15代棚倉城主松平康英が建立した「三界万霊塔」が建っています。また、この時捕まった者の中にはわずか13歳の少年も含まれていましたが、そのあまりに毅然とした最期の様子は「八溝小僧」とあだ名され、伝承として今に伝わっています。

4 伊乃草分地蔵尊（棚倉字宮下）

昔、五箇坂（棚倉字宮下）と呼ばれていた坂の北側にある小高い丘の上に立つ地蔵尊です。

伊乃草分地蔵は、古代の塩伊乃己自直命をお祀りしたものといわれています。大昔、塩伊乃己自直命はこの地方を開拓して農業や織物の技術を伝えた人物として人びとから慕われ、のち

にこの地を拓いた神様として神社に祀られるようになりました。その後、仏が日本の神の姿で民の前に現れるという神仏習合という考え方が広がると、塩伊乃己自直命も次第に地蔵菩薩の姿で崇められるようになったようです。

なお、名称の頭に付く「伊乃草分」とは、「伊乃（野）」の里を初めて開拓したこと＝草分という塩伊乃己自直命の業績からきています。

5 富岡供養塔（富岡字寺ノ前）

供養塔とは、鎌倉時代から室町時代にかけて、死者の供養の目的で作られた石造物です。全国的には板碑とも呼ばれ、現在の墓地で見られる卒塔婆の原型であるという説もあり、中世における信仰世界を知る手がかりとなる資料の１つとして研究されています。

棚倉町内では、現在12基の供養塔が確認されています。富岡地区にはそれぞれ、延慶２年（1309）、文保２年（1318）、延元４年（1339）に作られた３基と年号不明の１基があり、町内の供養塔の中で最も古いものです。

棚倉の名勝

1 八溝山

棚倉町の西側を画する八溝山地の最高峰であり、福島県や茨城県、栃木県の境ともなっている山が、八溝山（標高1022m）です。

山名の由来はいくつかあるようです。代表的なものを挙げてみましょう。１つは、久慈川の水源となる水を集める、山中の幾多にも入り組んだ渓谷をまとめて呼んだ総称として八溝と呼んだという説。また、今のように

街灯などがない時代に真っ暗な山へと向かう旅人に、土地の人びとが「ここから先は闇ぞ（やみぞ）」と教えたことから、読みの「やみぞ」がいつしか八溝へと転化したという説もあります。

八溝山は古くから人びととつながりを持った山でした。平安時代に編さんされた歴史書『続日本後紀』によると、承和3年（836）、八溝山から産出した黄金を朝廷に献上したとあり、山頂には八溝黄金神と呼ばれる神様が祀られていたことが分かります。

現在、山頂には八溝嶺神社が鎮座し、大己貴命（大国主命）が祭神として祀られています。延長5年（927）に作られた、全国の神社の格を定めた『延喜式神名帳』にもその名が見られることから、先述した八溝黄金神から続くものとも考えられます。

また、坂上田村麻呂（別項参照）や源頼朝といった歴史上の有名人にまつわる伝説が数多く残っており、また寛文13年（1673）には水戸黄門でお馴染みの徳川光圀が八溝山を訪れたことが記録に残されています。

2 桜清水（棚倉字北町）

棚倉小学校脇から、関口地区へと下る途中にある清水です。慶長14年（1609）に初代棚倉藩主立花宗茂は現在の棚倉小学校敷地に居宅を構え、大長屋と称して多数の桜を植えました。そして老桜の根元より湧き出た清水を桜清水と名付けて愛用したと言われています。棚倉小学校校歌の歌詞にも織り込まれています。

棚倉の遺跡

1 高渡遺跡（八槻字高渡）

久慈川の支流である宮川沿岸に位置する、縄文時代中期～後期（約5000～3000年前）にかけての集落跡です。東白川郡内の遺跡の中でも１、２を争うほどの多量の遺物が出土しており、縄文土器や石器、特に信仰遺物である土偶などが発見されています。

2 崖ノ上遺跡（棚倉字崖ノ上）

久慈川や町が眺められる河岸段丘に位置し、周囲はたなぐら霊園となっています。過去の発掘調査では、主に縄文時代後期～晩期（約4000～2400年前）の土器や石器などが出土していますが、古くから弥生時代の遺跡として有名です。

明治21年（1888）、元棚倉藩知事の阿部正功（別項参照）が中心となって行われた発掘調査では、弥生時代中期（約2100～1900年前）の壺形土器数点が出土しました。これらの土器は再葬墓と呼ばれる、遺体を土に埋めたり、風化させて骨のみにしてから土器に入れて埋葬したりする墓に用いられたものと考えられています。のちに「棚倉式土器」と命名され、東北における弥生時代土器研究において重要な資料となっています。

3 塚原古墳群（塚原字強清水）

久慈川を望む台地上にある、古墳時代後期（6世紀頃）の古墳群です。かつて10基を超える古墳が存在していましたが、現在は１基だけが残っています。この古墳は直径20ｍ、高さ約２ｍの円墳で、かつては墳丘全体が石によって覆われていたと考えられています。現在は、所々に落ちているこぶし大の石によって当時の名残が見て取れます。

出土遺物は、直刀（刀身に反りがない刀）や馬具（馬に乗るために使う道具）、石製模造品などが発見されています。

4 胡麻沢古墳（祝部内字胡麻沢）

白河市との境に近い山林内にある、古墳時代後期（６世紀頃）の円墳です。古墳の盛土は大半が削平されていましたが、内部から板状に加工した石を組み合わせた箱式石棺が２基発見され、棺内から人骨４体や副葬品である直刀１口や鉄鏃（鉄製のやじり）10本、骨鏃（鹿骨製のやじり）25本が出土しました。人骨は鑑定によると、40歳～55歳の男性２人と女性２人とされています。

この古墳で特に注目されるのは骨鏃の副葬です。古墳における鏃の副葬は鉄鏃が一般的で、骨鏃が出土した例は福島県内と隣の茨城県と栃木県にあるのみで全国的に少ない事例です。実際に矢に装着して利用したのか、あるいは非実用品として儀式などに使用したのか、今後の研究が待たれます。

5 堤古墳群（堤字羽黒東）

堤地区の鎮守である羽黒神社の北側の山林には、こんもりと緩やかな墳丘を持った円墳11基ほどが点在しています。最大のものは直径20ｍ前後、小さいものは約５ｍほどです。

造られたのは古墳時代後期（６世紀頃）で、小規模な円墳がいくつもまとまって群を構成するという、この時期の特徴がみられます。発掘調査がされていないため、実体はいまだに謎に包まれた古墳群です。

6　駅路と駅家

平安時代の初め、東白川地方には駅路（官道）と呼ばれる、大規模な直線道路が通っていました。

奈良時代、都の中央政府は支配のため、地方に国府や郡家といった役所（今でいう県庁や市町村の役所）を配置し、それらをつなぐための道路である駅路を日本列島に張り巡らせました。

駅路は、駅伝制という交通・通信制度という機能を持ちました。都、あるいは地方で緊急の連絡や非常事態が起こった際に、素早く情報を伝達するという役割があったのです。駅路の途上には、30里（約16km）毎に駅家と呼ばれる施設が置かれ、そこに常備された馬を役人が乗り継ぐことで、情報を伝えていくというシステムです。

さて、東白川地方を通過した道は東海道と東山道を結ぶ連絡路で、都から太平洋に沿うように進み、陸奥国までを結んでいました。この道はもともと、いわきや相馬といった浜通りを通過していましたが、平安時代の歴史書『日本後紀』によると、弘仁２年（811）に内陸のルートへと変更があったことが記されています。また同じ文中に、「長有」と「高野」の駅家を新設したともありますが、それぞれの駅家の比定地は諸説あり、具体的な場所は特定されていません。

棚倉町で駅路に関連すると考えられる遺跡として、下山本地区の松並平遺跡（別項参照）が挙げられます。古墳時代～平安時代の集落遺跡で、特に平安時代に入ると住居跡の数が飛躍的に増加することは、駅路や駅家の新設がきっかけとなっていると思われます。道路を管理する、あるいは駅家の馬を世話していた人びとが住んでいたのかもしれません。

7 松並平遺跡（下山本字松並平）

久慈川の西岸の台地上に広がる古墳時代～平安時代の集落跡で、塚原古墳群に隣接するような位置関係にあります。また、縄文時代中期の遺物も数多く出土しており、古来より住みやすい立地として認識されていたようです。

国道118号バイパスの建設に伴う発掘調査の結果、竪穴住居跡49軒、堀立柱建物跡14軒などが発見され、土師器や須恵器、多数の鉄製品などが出土しています。

また、当遺跡は平安時代に規模が拡大することや、当時の役人層が身に着けていたとされる帯金具が出土していることなど、近隣を通過したと考えられる駅路と何らかの関係があったとされています。

8 流廃寺跡（流字東山・国史跡）

流廃寺跡は、平安時代（９世紀後半～10世紀前半）に建立された寺院跡です。流地区の緩やかな丘陵上に位置し、大小多くの平場にお堂を建てています。

これまで棚倉町教育委員会では継続的な発掘調査を行い、多数の礎石建物跡を確認、瓦や土師器・須恵器、鉄製品といった数々の遺物を確認しました。特に、全国でも例のない金銀象嵌鉄剣の発見は、県内外で大きく報道され注目されました。

調査の成果から、流廃寺跡の建物配置（伽藍）遺構は残存状況が非常に良く、平安時代における仏教を考える上で全国的に貴重な遺跡であること、また東北地方に仏教が広がっていく様子を知るうえで重要な遺跡であることが明らかになりました。

流廃寺跡出土金銀象嵌鉄剣（県指定重要文化財）

流廃寺跡から出土した、全長約43㎝の平安時代の鉄製の剣です。刀身には金や銀を埋め込む象嵌技法によって、炎状の文様と、文字によって仏を表す梵字を交互に配しています。

剣の梵字は「胎蔵界五仏」という、密教における重要な仏を表しています。大きさや薄さから実用品ではなく、不動明王像が手に持っていたものか、あるいは仏教の儀式に使用されていたのではないかと推測されます。

9　鹿子焼窯跡（棚倉字南町）

城下町の台地の南端、八坂神社境内周辺には、かつてやきものを生産した窯があり、棚倉焼もしくは鹿子焼と呼ばれました。

棚倉における焼き物生産の歴史は殊の外古く、すでに９代棚倉城主小笠原長昌の時代（約200年前）には行われていたようです。しかし、城主の国替えが多いことや、材料となる良質な土が採れないことにより、棚倉ではなかなか産業として根付くことができませんでした。

明治40年（1907）に、町民有志による「棚倉陶磁器製作所」が設立され生産が本格化し、その質の良さは大正２年（1913）の勧業博覧会にて賞を受賞するほどの評価を得ました。しかし交通網の発達による、瀬戸焼といった安い陶磁器が全国を席巻すると次第に販路が縮小し製作所も解散、その後も細々と続けられた窯も昭和15年（1940）に歴史に幕を下ろしました。

棚倉焼は主に花瓶や茶碗、湯呑や皿といった日常雑器の生産が中心でしたが、鹿子焼は透き通るような美しい白色の陶磁器で、底に「鹿子焼」の判が押されているのが特徴です。現在まで伝えられている品は極めて少なく、まさしく町のお宝と言えるでしょう。

10 一里塚（八槻、逆川、山際）

一里塚とは、江戸時代に街道の距離の目印として、１里（約４km）毎に設置された塚のことです。町内で現存する一里塚は八槻、逆川、山際各地区にあり、下町には跡地として標柱が建てられています。

緑の文化財

緑の文化財とは、福島県内の神社やお寺などで長年人びとに大切に守られてきた貴重な樹木を保護する目的で、昭和58年（1983）に選定されたものです。棚倉町では８本の樹木が指定されています。

名　　称	所在地	高さ	樹齢	備　考
秋葉神社のケヤキ	棚倉字北町	28m	250年	
愛宕神社のヤマナシ	瀬ヶ野字仲ノ町	20m	200年	
希望のサクラ	逆川字山梨子山	13m	120年	町指定天然記念物
棚倉城跡の大ケヤキ	棚倉字城跡	32m	600年	県指定天然記念物
堤のしだれザクラ	堤字羽黒東	24m	150年	
花園のコウヤマキ	花園字大明神	21m	700年	町指定天然記念物
二柱神社のスギ	寺山字守崎	37m	1000年	県指定天然記念物
蓮家寺の大ケヤキ	棚倉字新町	32m	350年	

※いずれも昭和58年（1983）時点

花園のコウヤマキ

希望のサクラ

棚倉の偉人

棚倉の歴代藩主一覧

大　名	藩　主	在　任　期　間	事　　項
立　花　家	立花　宗茂	慶長11年(1606)～元和 6 年(1620)	筑後柳河藩に転封
丹　羽　家	丹羽　長重	元和 8 年(1622)～寛永 4 年(1627)	陸奥白河藩に転封
内　藤　家	内藤　信照	寛永 4 年(1627)～寛文 5 年(1665)	
	内藤　信良	寛文 5 年(1665)～延宝 2 年(1674)	
	内藤　弌信	延宝 2 年(1674)～宝永 2 年(1705)	駿河田中藩に転封
太　田　家	太田　資晴	宝永 2 年(1705)～享保13年(1728)	上野館林藩に転封
越智松平家	松平　武元	享保13年(1728)～延享 3 年(1746)	上野館林藩に転封
小 笠 原 家	小笠原長恭	延享 3 年(1746)～安永 5 年(1776)	
	小笠原長堯	安永 5 年(1776)～文化 9 年(1812)	
	小笠原長昌	文化 9 年(1812)～文化14年(1817)	肥前唐津藩に転封
井　上　家	井上　正甫	文化14年(1817)～文政 3 年(1820)	
	井上　正春	文政 3 年(1820)～天保 7 年(1836)	上野館林藩に転封
松井松平家	松平　康爵	天保 7 年(1836)～嘉永 7 年(1854)	
	松平　康圭	嘉永 7 年(1854)～文久 2 年(1862)	
	松平　康泰	文久 2 年(1862)～元治元年(1864)	
	松平　康英	元治元年(1864)～慶応 2 年(1866)	武蔵川越藩に転封
阿　部　家	阿部　正静	慶応2年(1866)～慶応4(明治元)年(1868)	
	阿部　正功	慶応4(明治元)年(1868)～明治4年(1871)	廃藩置県

歴代の棚倉城主　※（　）内は城主を務めた期間

1　初代城主 丹羽五郎左衛門長重（1622～1627）

丹羽長重は棚倉城をはじめ、白河小峰城といった数々のお城を手掛けた大名です。

長重は元亀２年（1571）に美濃国（岐阜県）に生まれました。丹羽家は有力な戦国大名であり、父である長秀は織田信長や豊臣秀吉に仕えました。特に秀吉は長秀を慕い、信長の家臣であった際に名乗った姓「羽柴」の羽の字は、丹羽の羽の字から取ったほどと言われています。

天正13年（1585）、長秀の死によって丹羽家を継いだ長重は秀吉の家臣として働いたものの、度重なる失態で次第に不仲となり、領地を削られて加賀国小松（石川県）に移されました。関ヶ原の戦いでは豊臣方に味方したため、徳川家康により領地を没収されてしまいますが、のちに息子の秀忠に許され、慶長８年（1603）に常陸国古渡（茨城県）にて１万石の大名に復活しました。豊臣家が滅んだ大坂の陣での働きにより家康にも認められ領地を増やし、元和８年（1622）に棚倉５万石へと移ってきました。

寛永元年（1624）に棚倉城築城を開始した長重でしたが３年後、それまで隣国白河も治めていた会津の蒲生家廃絶のあとを引き継いで白河へ移りました。城はまだ完成しておらず、次の城主内藤信照に工事が引き継がれました。

2　２代城主 内藤豊前守信照（1627～1665）

寛永４年（1627）、棚倉から隣の白河へと移った丹羽長重に代わり、新しく近江国（滋賀県）から内藤信照がやって来ました。

内藤家は、戦国時代から三河国（愛知県）にて徳川家に仕えてきた、いわゆる譜代大名です。ところで、関ヶ原の戦いより以前から忠義を尽くしていた内藤家が棚倉に移ってきたのは理由がありました。徳川家は、仙台藩の伊達家という強大な大名家に謀反を起こさせないよう、昔から付き従ってきた家来を東北の玄関口にあたる地域に配置し、にらみを利かせたのです。

さて、信照がまず最初に取り組まなければならない仕事は、前城主がやり残した棚倉城を完成させること、そして城下町の整備でした。また、棚倉藩政を支える政策も数多く実施しています。例えば、財政の確保のために領内の田畑の収穫量を調査して税を決め、久慈川の水運交通の整備、さらには生活用水確保のために玉野堰の管理を徹底するといった生活インフラに至るまでこの時期に多くが確立しました。

信照は信仰にも厚く、神社や寺に対して積極的な保護をしました。例えば、蓮家寺（別項参照）に銅鐘を寄進したり、境内に新しく堂を建立したりするなどしています。さらに、信照自身も赤館の麓に光徳寺（こうとくじ）を建立し、紫衣事件（しえじけん）（別項参照）によって配流された玉室宗珀（ぎょくしつそうはく）を手厚くもてなしました。

このように棚倉藩の基礎固めを担った信照は、寛文５年（1665）に74歳でこの世を去りました。

3　3代城主 内藤豊前守信良（ないとうぶぜんのかみのぶよし）（1665～1674）

信照死後、息子である信良が跡を継いで棚倉城主となりました。

彼の代は、困難の一言に尽きます。藩の財政は早くも苦しく、領内の農民も度重なる課税によって疲弊していました。そしてさらにそれに追討ちをかけたのが、棚倉城下を焼き尽くした寛文（かんぶん）の大火（たいか）でした。

記録によると寛文12年（1672）正月、新町から出た火は強風に煽（あお）られて瞬く間に広がり、信良自ら消火の指揮にあたったものの空しく、城下の武家屋敷136戸や民家312戸、蓮家寺も焼けてしまったとあります。復興再建には莫大な費用がかかったことは間違いなく、より一層苦しい財政となってしまったに違いありません。

延宝（えんぽう）２年（1674）に藩政から退いた信良は、元禄（げんろく）８年（1695）に71年の生涯を終えました。

4　4代城主 内藤豊前守弐信（ないとうぶぜんのかみかずのぶ）（1674～1705）

信良の後を継いだのは、養子で信良のはとこにあたる弐信です。領内では農作物の不作や飢饉が相次いでおり、救済のためのお金を出すなど藩の財政は相変わ

らず苦しくなる一方でした。解決の手だてを打てない弌信を見兼ねた江戸幕府は、改革のスペシャリストとして松波勘十郎（別項参照）を棚倉に送り込んできました。

弌信は勘十郎に作改奉行という役職を与え、早速財政改革にあたらせました。彼の施策は端的に言うと、増税に加えて農民の人びとの生活に極端な倹約を求めたものでした。それは村々の祭りといった生活行事まで無駄として切り捨てるような厳しさで、次第に勘十郎に対する不満や反発を集め、結局改革は失敗に終わってしまいました。

また一方で、内藤家の先代と同様に弌信もまた信仰が厚かったといいます。現在残る宇迦神社の本殿は、元禄14年（1701）に弌信が造営しました。

宝永２年（1705）、駿河国田中藩（静岡県）へと移ることが決まり、内藤家３代に渡る棚倉藩政は終わりました。

5　5代城主 太田備中守資晴（1705～1728）

宝永２年（1705）駿河国田中藩から内藤弌信と入れ替わるように棚倉城主となったのが太田資晴でした。

太田家は、江戸城を築城した太田道灌などを輩出した一族の系譜ともいわれていますが、詳細は定かではありません。父である資直は、幕府５代将軍綱吉の世話係である近習を務めるほどの信頼を得た人物でした。

資晴が造った寺が、花園地区にある長久寺です。宝永４年（1707）に建てられたこの寺に対して尽力を惜しまず、棚倉城の南門を寄進、移して山門とするほどでした。

江戸幕府においても要職を歴任した資晴は、享保13年（1728）に上野国館林藩（群馬県）へと移りました。

6　6代城主 松平右近将監武元（1728～1746）

享保13年（1728）、太田資晴と入れ替わるように上野国館林藩から移ってきた武元は16歳の若さで棚倉城主となります。

武元を輩出した松平家は、越智松平家と呼ばれる江戸幕府６代将軍徳川家宣の

弟の松平清武から成立した家で、大名の中でも御三家（徳川姓を名乗ることが許された尾張・紀伊・水戸）に次ぐ親藩の格を持った、将軍家に近い家柄でした。ちなみに、のちに棚倉城主を務める松平家とは別の系譜です。

元文４年（1739）、棚倉藩が治めていた領地２万５千石、55か村が、江戸幕府将軍の直接支配地である天領に組み込まれました。代わりに幕府から与えられた土地は遠方に位置していたため、棚倉藩は経営のために人を派遣しなければならず大きな負担となったようです。

城主を務める傍ら、武元は幕府においても要職を務めました。元文４年（1739）には、大名の出世の登竜門とされる奏者番（江戸幕府において大名・旗本が将軍に謁見する際、取り次ぎをする役職）を務め、５年後には全国の寺院や神社を管轄する寺社奉行を兼任しました。延享３年（1746）に再び館林に移り、のちに江戸幕府の最高職である老中を務めました。

7　７代城主 小笠原佐渡守長恭（1746～1776）

延享３年（1746）、遠江国掛川藩（静岡県）より移ってきた長恭は、わずか７歳で棚倉城主となりました。

小笠原家の遠い祖先は甲斐国（山梨県）や信濃国（長野県）を拠点とした一族で、初代忠知は徳川秀忠や家光に仕え、豊後国杵築藩（大分県）を創始しました。その後も三河国吉田藩（愛知県）や武蔵国岩槻藩（埼玉県）などを経て着々と石高を伸ばしていきました。棚倉では、３代71年間にわたり城主となり、これは内藤家に次ぐ長さです。

寛延２年（1749）、前城主の代に天領となっていた塙にて、戸塚騒動と呼ばれる大規模な一揆が起こりました。この出来事の鎮圧のため、長恭も60人ほどの兵隊を天領支配の拠点である代官所へ配下を派遣しています。

安永５年（1776）、37歳で亡くなりました。

8　８代城主 小笠原佐渡守長堯（1776～1812）

父長恭の死によって、安永５年（1776）に息子である長堯が17歳の若さで棚倉城主を継ぎました。

天明4年（1784）、6代棚倉城主松平武元の代に天領となった塙の領地の内17か村が、棚倉藩の支配へと戻されました。また、寛政10年（1798）には、近隣で起こった大規模な農民一揆である浅川騒動を抑えるため、白河や三春と共に棚倉より援軍を出しました。

また長堯の代には、小笠原騒動という政治スキャンダルが起こったとされています（別項「小笠原栄七郎の墓」参照）。長堯の弟である栄七郎が、長堯を失脚させて家督相続を目論んだものでしたが失敗に終わり関係者の多くが処罰されたという事件です。

また、天明の大飢饉では、ほとんど被害を出さなかったとされます。その手腕を認められて、寛政2年（1790）に奏者番に任ぜられて、白河城主の松平定信が行った寛政の改革にも参与しました。

文化9年（1812）に息子の長昌に城主の座を譲り、同じ年に49歳で亡くなりました。

9　9代城主 小笠原主殿頭長昌（1812～1817）

文化9年（1812）に父長堯の後を継ぎ、棚倉城主となりました。

翌年の文化10年（1813）、紅葉山火之番の役を江戸幕府より任されます。紅葉山とは江戸城の西丸にある、幕府歴代将軍を祀る廟が置かれた場所で、家康の命日には紅葉山御社参とよばれる公式行事が行われた神聖な場所でした。その場所の火之番とは、すなわち警備や防災を担う役職です。

文化14年（1817）、肥前国唐津藩（佐賀県）に移り、小笠原家3代にわたる棚倉支配は終わりました。

10　10代城主 井上河内守正甫（1817～1820）

文化14年（1817）、遠江国浜松藩（静岡県）の井上正甫が新しい棚倉城主となりました。

井上家はもともと信濃国を本拠地としていた一族で、初代正就の母が徳川秀忠の乳母を務めた関係から取り立てられ、次第に幕府の中核を担っていきました。棚倉藩の前は、常陸国笠間藩（茨城県）や陸奥国磐城平藩（福島県）などを歴任

しています。

正甫は大変スキャンダラスな人物として伝えられています。棚倉に移って来た理由というのも、酒が入った勢いで農家の女性を手籠めにしようとしたという醜聞が幕府に知れ、その処罰としての意味が強いものでした。

正甫は浜松から棚倉への国替えについて大いに不満を持ち、結局死ぬまで棚倉の地を訪れることはありませんでした。その嫌いさは相当なもので、棚倉はどこもかしこも蛇だらけで、城の米が喰い尽されてしまう、また寝ている時でさえも棒で追い払わなければならないほどだという根も葉もない噂を幕府へ申し立てているほどです。

文政（ぶんせい）3年（1820）、早々に息子の正春に家督を譲った正甫は隠居生活に入ってしまいました。

11　11代城主 井上河内守正春（いのうえかわちのかみまさはる）（1820〜1836）

文政（ぶんせい）3年（1820）に15歳で棚倉城主となりました。一度も棚倉に足を踏み入れることのなかった父正甫とは違い、正春は棚倉藩主を務めて以降、メキメキ頭角を現していきます。

天保（てんぽう）5年（1834）には、大名の出世の登竜門とされる奏者番（そうじゃばん）や寺社奉行（じしゃぶぎょう）を兼任しました。天保7年（1836）、上野国館林藩（こうずけのくにたてばやしはん）（群馬県）へと移りました。

余談ですがこの後、館林藩へと移った正春は天保11年（1840）には幕府最高職である老中にまで上り詰め、その5年後にはかつて父正甫が治めていた遠江国浜松藩（とおとうみのくにはままつはん）（静岡県）に戻って来ることになります。

12　12代城主 松平周防守康爵（まつだいらすおうのかみやすたか）（1836〜1854）

井上正春に代わり、天保（てんぽう）7年（1836）に石見国浜田藩（いわみのくにはまだはん）（島根県）より松平康爵が新しい棚倉城主となりました。

松平家は6代城主松平武元と同じく親藩の家柄で、長く西国の外様大名に対するおさえとして機能した家でした。しかし父の康任（やすとう）は、老中在任中の同6年12月、但馬国出石藩（たじまのくにいずしはん）（兵庫県豊岡市）のお家騒動（仙石騒動）に関係した罪で隠居・慎みの処分を受け、翌年3月、康爵に棚倉への移封が命じられました。城引渡しの

準備中の６月に発覚した密貿易に藩が関わっていたため、こちらの方を転封の理由としているものもあります。

康爵の代に、南町地区の大部屋稲荷が造立されました（別項「大部屋稲荷神社」参照）。また、北山本地区の山本不動尊には、康爵により寄進された開運祈願の石灯籠が今も残っています。

嘉永７年（1854）、養子である康圭に城主の座を譲って退きました。

13　13代城主 松平周防守康圭（1854～1862）

嘉永７年（1854）に兄の康爵の養子となり、城主となりました。

康圭の代に起こった一大事として、安政の大地震が起こりました。これは安政２年（1855）に江戸を襲ったM6.9の大地震で、8000人を超える死傷者を出したといわれています。この地震で、松平家の江戸屋敷も甚大な被害を受け、康圭は棚倉から職人を派遣して修理にあたらせました。

また幕府における役職をみてみると、江戸城の大手門や桜田門の門番や、文久元年（1861）に幕府14代将軍徳川家茂に嫁いだ孝明天皇の妹和宮が江戸に向かう際にお供を務めるなど、警備に関する仕事で功績をあげました。

文久２年（1862）、病によって42歳で死去し、幼年の康泰に松平家を託しました。

14　14代城主 松平周防守康泰（1862～1864）

文久２年（1862）の康圭の死去により、新しい城主となりました。

康泰は非常に病弱であったらしく、わずか２年の藩主生活で、元治元年（1864）に16歳という若さで亡くなってしまいます。

康泰が藩主の代に起こった事件が、天狗党の乱です（別項「三界万霊塔」参照）。隣国の常陸国から逃れてきた天狗党残党は棚倉周辺にも落ち延びており、藩は幕府の命令によって彼らを次々と捕えていきました。

15　15代城主 松平周防守康英（1864～1866）

病弱であった康泰に代わり、新しく棚倉城主となったのは松平康英です。

康英は非常な秀才で、若くして数々の業績を残しています。江戸幕府はこの頃、ペリーの黒船来航以来の外交問題を最重要課題として取り組んでいました。康英も棚倉城主を務める以前に、今の外務省にあたる外国奉行や開港して間もない横浜港周辺を管轄する神奈川奉行などを勤めました。また文久元年（1861）には、ヨーロッパ遣欧使節団の副使を務め、ロシアとの国境問題の交渉役に抜擢されています。

慶応元年（1865）には幕府最高職である老中を務め、翌年には業績を認められて領地を増やされ、武蔵国川越藩（埼玉県）へと移りました。

16　16代城主 阿部美作守正静（1866～1868）

4代にわたり棚倉を治めた松平家に代わり、隣の白河から移って来た阿部正静が慶応2年（1866）に新しい棚倉城主となりました。

阿部家は、関ヶ原の戦い以前より徳川家康に仕えてきた一族です。なお、阿部家は備後国福山藩（広島県）などを治めた別の系譜が本家にあたり、例えばペリー来航時に幕府のトップである老中筆頭として対策にあたった阿部正弘などを輩出しています。棚倉を治めた阿部家は分家にあたります。

新たな城主を迎えた棚倉藩でしたが、次第に日本全体を巻き込む戦乱の暗い影が忍び寄っていました。慶応4年（1868）、江戸幕府に対する不満を募らせた薩摩藩や長州藩などによる新政府軍と幕府軍との間に戦いの火蓋が切られると、棚倉藩は幕府軍側に味方し、東北や越州の諸藩から構成された奥羽越列藩同盟に参加、戦に備えました。しかし、陥落した白河城を拠点とした新政府軍は各地で幕府軍の戦いに勝利し、着々と棚倉へと迫っていました。

正静は棚倉の防備を万全にすべく、東北諸藩に援軍を求むべく各地を奔走します。しかし、彼が城を離れていた慶応4年6月、白河から出撃した新政府軍との戦闘により棚倉城下は壊滅し、244年間にわたる棚倉藩の歴史は終りを告げたのです。

棚倉ゆかりの人びと

1 坂上田村麻呂（758～811）

坂上田村麻呂は平安時代、東北の蝦夷征討に活躍した武人です。

坂上氏は、代々武門の家柄で天皇の信頼も厚い家柄であったとされ、田村麻呂も若くして武官となり、当時の中央政府である朝廷に出仕するようになります。

この頃、朝廷を悩ます大問題が蝦夷の反乱でした。陸奥国（現在の東北地方）では朝廷の支配を嫌う蝦夷が反乱を繰り返しており、いかにそれを鎮めるかが課題となっていたのです。

天応元年（781）、新しく即位した桓武天皇は反乱に対処すべく、大規模な征討軍を組織して東北へ向けて送り込んでいきました。しかし、蝦夷勢力の予想を上回る軍事力により戦いは長期化します。延暦10年（791）に副将軍の地位である征東副使の１人として従軍した田村麻呂は戦いにおいて功績をあげ、延暦16年（797）にはすべての軍事指揮権をもつ征夷大将軍として再び東北の地に進軍し、蝦夷反乱軍を鎮圧することに成功しました。その後も最高行政官として、東北地方の支配に尽力したとされています。

伝説によると田村麻呂は、馬場都々古別神社の創建に関わっているとされています。大同２年（807）、建鉾山（白河市表郷地区）に祀られていた神を現在の棚倉城跡に遷して社殿を造営したことが、馬場都々古別神社の由来について記されている『馬場都々古別神社縁起』にあります。

2 源義家（1039～1106）

源義家は平安時代後期の武将で、東北や関東における戦役で功績を挙げ、さらには多くの武士を従えるリーダー的存在として源氏発展の礎を築いたことで知られています。

源氏は平安時代後期、藤原氏といった貴族が政治を行う中で、平氏と並び武力にものを言わせて発展してきた一族であり、のちに鎌倉幕府を開く源頼朝などが知られています。

義家は康平５年（1062）、東北の豪族であった安倍氏との抗争である前九年の役に勝利し、その後朝廷から東北支配を任された長官職である陸奥守に就いた義

家は、出羽国を拠点に勢力を拡大していた清原氏の内紛に介入（後三年の役：1083～1087）するなど、東国における軍事的地位を築いていきました。武士たちの信頼も厚く、後世には文武両道の名将として語られています。

一説では、馬場都々古別神社の神宝である長覆輪太刀（別項参照）や赤糸威鎧残闕（別項参照）は、義家が東北の乱を平定した折にこの地を訪れて奉納したものであると伝えられています。

3 立花左近将監宗茂（1569～1642）

江戸幕府成立後、初めて棚倉藩を治めた藩主が立花宗茂です。

宗茂は、豊臣秀吉の九州攻めの際に手柄をたて、筑後国柳河藩（福岡県）の藩主となりました。その後も秀吉のもとで、相模国（神奈川県）の後北条氏を滅ぼした小田原攻めや朝鮮出兵でも活躍しましたが、関ヶ原の戦いで豊臣方に味方したため、徳川家康の処分によって領地や地位を失ってしまいます。しかし慶長９年（1604）に許されて幕府に奉仕し、２年後に棚倉の支配をまかされました。

宗茂は赤館城主として棚倉を治めました。しかし実際の住まいとしたのは大長屋と呼ばれる、現在の棚倉小学校の敷地にあった御殿だったと言われています。彼がどのような政治を行ったかを示すわずかな記録によれば、馬場・八槻両都々古別神社の朱印状取得に尽力したとあります。朱印状とは幕府が発行する公式文書のことで、このことは都々古別神社が藩からの税を取られない、私としての土地の所有を認められたことを示しています。

元和６年（1620）､それまで柳河藩主であった田中吉政が死去し、後継ぎがいなかったため再び宗茂が移ることとなり、実に約20年ぶりに柳河藩へ返り咲きました。

4 玉室宗珀（1572～1641）

玉室宗珀は、臨済宗大徳寺派の大本山である京都大徳寺の住職を務めた高名な僧です。

慶長12年（1607）、時の後水尾天皇の勅許によって大徳寺で最も高位の僧となった宗珀は、その証として紫衣という紫色の法服を贈られます。また翌年には、加賀藩（石川県）の歴代藩主である前田家の菩提寺である芳春院の創建に関わるなど、高僧として多くの尊敬を集めました。

しかし寛永６年（1629）、幕府は天皇による紫衣の勅許が幕府の許可を得ずに行われたことを問題とし、紫衣の無効を宣言しました。これに抗議した宗珀や同門の沢庵宗彭（沢庵漬けで有名な沢庵和尚）は幕府の怒りに触れ、それぞれ東北へ流罪となってしまいます。この一件を紫衣事件と言います。

宗珀が流された先は棚倉藩で、当時の棚倉城主内藤信照は、赤館城跡の南麓に自ら建立した光徳寺境内に庵を設け、手厚く彼を世話し親睦を深めたと伝えられています。棚倉での生活は、流罪を解かれて京都へと戻る寛永９年（1632）まで続きました。

かつて宗珀が住まいとした庵の跡地とされる場所には石碑が建てられ、つつましく暮らした彼の姿を偲ばせています。

5 小川芋銭（1868～1938）

小川芋銭は、明治～昭和期に活躍した日本画家です。茨城県牛久市で農業に勤しむ傍ら、近隣の風景や農民の生活といった身近な題材を好んで描き、また河童の絵を多く描いたことから「河童の芋銭」とも呼ばれています。

芋銭は、玉室宗珀（別項参照）の庵の跡地に建つ碑の碑文を手がけています。碑は、昭和５年（1930）に地元の俳人で農業教育者でもあった片山麟一らによって建立されたことが分かっていましたが、碑文の作者は長い間不明でした。しかし、平成22年（2010）に見つかった史料により、片山は親交の深かった芋銭に碑文の作成を依頼したことが分かりました。

碑は表に「玉室宗珀謫居之跡」として、かつてここに住んだ偉人を今もたたえています。

6 佐竹義重（1547～1612）

佐竹義重は戦国時代に活躍した武将で、彼の代に佐竹氏は棚倉を含めた南東北地域を支配しました。

佐竹氏は、常陸国久慈郡（茨城県常陸太田市ほか）を拠点にし、周辺の武士たちをまとめて次第に領地を拡大していった有力な一族でした。永禄５年（1562）に16歳の若さで佐竹氏を率いるリーダーとなった義重は、常陸国や下野国（栃木県）へと活発に支配権を拡大していき、次第に北関東を代表する戦国大名としての地位を確立していきます。のちに、南関東の後北条氏や東北の伊達政宗とも対抗しました。

元亀３年（1572）、義重率いる軍勢は当時棚倉を治めていた白河結城氏の一大拠点である赤館城を奪取すべく、攻撃を開始しました。佐竹氏の侵攻を食い止めたい白河結城氏は近隣の大名と連合して迎え撃ったために戦いは長期化しましたが、２年後の天正２年（1574）、ついに赤館城は落ち、更なる北への侵攻を目論む佐竹氏の拠点として機能することになります。

棚倉の地は佐竹氏の領地となりましたが、天正17年（1589）に勃発した伊達政宗と対峙した赤館戦争など、戦乱がなくなることはありませんでした。

7 佐竹義宣（1570～1633）

佐竹義重は天正14年（1586）、家督を子の義宣に譲ります。

義宣は当主になって早々、佐竹氏のライバルであった後北条氏を滅ぼす小田原攻めに参加した功により、翌年に時の天下人であった豊臣秀吉から常陸国や下野国の正式な支配権を認められました。天正19年（1591）には本拠であった太田城（茨城県常陸太田市）から水戸城（同水戸市）に移り、常陸国における支配をより盤石なものとします。

義宣の代にも、棚倉は引き続き佐竹氏の領地でした。棚倉における彼の事業は何といっても、文禄３年（1594）、秀吉の命によって馬場都々古別神社の本殿を建立したことです。

このように、常陸を中心として北関東に君臨した義宣でしたが、慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いで豊臣方に味方したために領地を没収され、２年後に出羽国秋田

（秋田県）へと移りました。以後佐竹氏は、幕末を迎えるまで秋田を支配することになります。

8 松波勘十郎（?～1710）

松波勘十郎は、４代棚倉城主内藤弐信（別項参照）の時代に登用され、藩の苦しい財政の再建に取り組んだ人物です。棚倉藩のほかにも隣国の水戸藩（茨城県）や三次藩（岡山県）、郡山藩（奈良県）など、全国を股に掛けて活躍した改革のスペシャリストでした。

弐信が棚倉を治めていた時代は、度重なる飢饉や先代の信良の時代に起きた大火の復興によって藩の財政は火の車で、うまい対処法を打てずにいました。作改奉行という役職に就いた勘十郎は早速、現在の国勢調査ともいうべき、棚倉藩領内の土地や人びとの生活状況を事細かに書いた報告書を作成します。これにより、新しく開墾した田畑や耕作以外の内職、商人たちの経済活動など、これまでなかった対象に課税を行いました。また極度の倹約令を出し、村の祭りや人びとの祝いの行事にさえ干渉したほどでした。

こうした彼の行き過ぎた政策は、領内の人びとの大反発を買います。同じころ財政再建を手がけていた水戸藩では遂に一揆が起こり、勘十郎は捕えられて、当時最も残酷な鋸引きの刑によって処刑されてしまいました。勘十郎の手腕に期待した弐信でしたが、結局財政を立て直すことが叶わないまま、国替えによって棚倉を去ったのでした。

9 徳川光圀（1628～1700）

徳川光圀は、棚倉藩の隣国である常陸国水戸藩の２代目藩主で、時代劇ではお馴染みの水戸黄門様として親しまれています。

光圀は水戸藩において、当時先進的であった政策を次々と行いました。例えば、父である頼房死去の際に家来に対し、当時の風習であった後を追って死ぬことを禁止した殉死禁止令や、巨大な帆船快風丸を造って当時未開拓の地であった蝦夷地（北海道）の探検を行っています。中でも特筆されるのが、日本で初めての通史的歴史書である『大日本史』の編さん事業を手掛け、下野国（栃木県）の那須

国造碑の保護や上・下侍塚古墳の発掘調査を行うなど、いち早く古典研究や文化財の保存活動の先駆けとなったことです。

光圀は棚倉にも足跡を残しています。彼が書いた「常山文集拾遺」には、寛文13年（1673）に八溝山を訪れた際に作った詩が収められています。また、八槻都々古別神社に御簾を寄進したり、別当八槻家との間で贈答品のやりとりを記した書状が残っていたりと、交流があったことがうかがえます。

10 斎藤彦麿（1768～1854?）

斎藤彦麿は、江戸中期～後期に活躍した、日本の古典や古代史を研究する国学者として名を馳せた人物です。石見国浜田藩（島根県）藩主松平康任や、息子で12代棚倉城主となる康爵の２代に仕え、一説には国学の大成者である本居宣長のもとで学んだとも伝わっています。

彦麿は実に博識高い人物で、多くの優れた歌を残し、また貴族や武家の儀式作法である有職故実や古文を集めて紐とくなどといった研究を行っていました。こういった成果は『伊勢物語絵抄』や『源氏物語難語抄』といった古典研究に発揮され、実に20冊以上もの本を出しました。

彦麿の死没年については諸説ありますが、棚倉にて生涯を終えたと伝えられています。

11 十六ささげ隊

幕末の戊辰戦争において、棚倉藩では藩士や関係者合わせて58名が戦死したといわれています。その戦いぶりを物語るものに、十六ささげ隊の話が伝わっています。

十六ささげ隊は、藩士阿部内膳を総指揮とする16人の少数精鋭部隊でした。彼らは夜闇に乗じて敵を襲う戦法を得意としたため、「仙台烏に十六ささげなけりゃ官軍高枕（奥羽連合軍に十六ささげ隊がいなければ、新政府軍も安心して眠ることができ

るのに）」と揺われるほど恐れられていました。

この部隊の名前の由来は諸説あります。１つは、白河地方で古くから栽培されていた「十六ささげ」という豆の名前からとったといわれています。十六ささげは実が赤茶色、サヤが薄緑色で、これらの色がそれぞれ甲冑や旗印の色と同じだったようです。また、彼らが鎧兜に弓や槍をかまえ勇猛果敢に戦って「身を捧げる」ことから名付けられたという説もあります。

12 板垣退助（1837～1919）

板垣退助は、明治時代に活躍した土佐藩（高知県）出身の政治家です。日本初の政党である自由党を結成、そして民撰議院設立建白書を提出し国会開設を訴えた自由民権運動を掲げるなど、日本における数々の政治の礎を築いたことで知られています。

一方で若き日の退助は、幕末期に新政府軍の主要メンバーとして戊辰戦争に参加しました。土佐藩をまとめ上げて討幕運動を推し進めると、戊辰戦争では東山道先鋒総督付参謀という東国進軍の重役を担って次々と幕府軍を破りました。東北での戦いでは、慶応４年（1868）６月に白河を拠点とした新政府軍約800人を率いて棚倉城を攻めています。棚倉では１カ月間にわたり、新町地区の蓮家寺を陣として落城後にしばらく支配したと伝えられています。

13 西郷頼母（保科近悳）（1830～1903）

西郷頼母は、幕末期の会津藩主松平容保のもとで家臣の最高職である家老を務めた人物です。

会津藩は初代会津松平家の保科正之が、幕府３代将軍の徳川家光の弟である関係から将軍家との結びつきが古く、幕末の動乱期においても幕府方の要職をまかされます。文久２年（1862）、京都の治安維持にあたる京都守護職に容保が推されると、頼母は尊王攘夷派といった幕府に反抗する勢力の矢面に立たされる危険から必死に反対するなど、家臣の中で一貫して会津藩を守ろうと奮闘します。しかし彼の思いは実らず、結果として会津は朝敵として新政府軍の目の敵となり、戊辰戦争によって会津は灰燼に帰してしまいます。

明治維新後、頼母は保科近悳と改名し、東北や関東の神社の神職を歴任します。その１つが馬場都々古別神社で、明治８年（1875）から数年間にわたり宮司を務めました。在職中に近悳は、馬場都々古別神社の歴史や伝来する宝物をまとめた『縁起備考』という本を記しています。

14 稲垣千頴（1847～1913）

稲垣千頴は、幕末から明治期に活躍した国学者であり、卒業式でお馴染みの唱歌「蛍の光」の作詞者として知られています。

彼は、12代棚倉城主松平康爵が棚倉藩を治めていた弘化４年（1847）、家臣稲垣半太夫の次男として生まれました。教育熱心な松平家が城下に開いた学校青藍塾で学び、慶応２年（1866）に松平家の川越転封に伴い、藩校長善館の教師として赴任しました。その後も著名な国学者の平田篤胤が開いた気吹舎の塾頭を務めるなどメキメキと頭角を現し、明治16年（1883）には東京師範学校（現筑波大学）の教諭になっています。また、『和文読本』『本朝文範』といった、和文や国学の教科書編集にも尽力しました。

「蛍の光」の原曲は「オールド・ラング・ザイン」という、英米では年越しの際に歌われるスコットランド民謡です。維新後の西洋音楽教育の導入にあたり、当初から卒業式で歌われるものを目指して、千頴はそれにふさわしい歌詞を書き上げました。

千頴が作詞した「蛍の光」は明治16年（1883）に初めて演奏されて以後、日本の卒業式にとって欠かすことのできない唱歌として今に至っています。

15 阿部正功（1860～1925）

幕末の戊辰戦争に敗北した棚倉の人びとは、新しい明治の世になってから少しずつ復興を遂げていきます。その先頭に立って行政に尽力したのが阿部正功でした。

正功は、白河藩主阿部正耆の次男として生まれました。戊辰戦争で当時の棚倉

城主阿部正静（別項参照）は幕府方に味方したため、新政府は彼の義理の叔父にあたる、わずか９歳の正功に棚倉藩をまかせました。明治２年（1869）、それまで藩主が持っていた土地と人びとを朝廷のもとに返す版籍奉還が実施され、正功の位置付けは新政府の中の行政官である藩知事となりました。いわば、新政府の役人の１人として棚倉を担うことになったのです。

正功の棚倉における１番の業績は、藩校修道館の再興です。阿部家が白河藩主の時代に開き、棚倉に国替えの折に移転してきた学校で、正功自身もここで学問を学んだとされています。棚倉城下を中心に塙やいわきに５つの分校を擁し、廃校後も修道小学として受け継がれるなど教育の基礎を築きました。

明治４年（1871）の廃藩置県によって藩知事を辞職した正功は、その後も慶應義塾などで学問を続けました。特に人類学や考古学に造詣が深く、当時の学界で中心的な役割を果たした坪井正五郎や鳥居龍蔵といった学者とともに各地で調査を行っています。その１つが町内にある崖ノ上遺跡（別項参照）であり、棚倉における初めての遺跡発掘調査といえるでしょう。

16 折口信夫（1887～1953）

折口信夫は明治～昭和期に活躍した、民俗学者・歌人です。

信夫は大阪で生まれ育ち、國學院大學で国学を学んだのち、日本を代表する短歌雑誌『アララギ』や『日光』の同人として精力的に歌を発表しました。また、民俗学の研究でも知られ、柳田国男らとともに学界の確立に貢献しました。

信夫は、福島県立修明高校の前身である旧東白川農商高校の校歌の補作を担当しています。

17 田山花袋（1871～1930）

『蒲団』『田舎教師』などで知られる、明治～昭和期に活躍した小説家です。文壇において、人間の社会を客観的に描こうとする自然主義を確立したことで知

られ、のちに私小説というジャンルへと受け継がれていきます。

花袋がまだ貧しい文学書生だった明治23年（1890）、当時の棚倉や周辺地域行政のトップである東白川郡長を務めていた義兄から縁談をすすめられ、棚倉を訪れました。お相手は八槻都々古別神社の宮司の娘でしたが、先方の婿入試験に落第し、縁談は実らずに終わりました。

棚倉滞在中、花袋は棚倉の色々な所に足を運び、人びとと親交を深めたようで、その間に見聞きした名勝や旧跡を和歌に詠んだ『棚倉百勝詠歌集』という作品を残しています。また花園地区の長久寺や富岡地区の蔵光寺には花袋の詠んだ歌を記念した歌碑が建立されています。

18 勝田蕉琴（1879～1963）

勝田蕉琴は棚倉出身の日本画家です。

蕉琴が絵を志したのは、13～14歳の頃に会津出身の画家である野出蕉雨に絵の手ほどきを受けたことがきっかけでした。蕉琴の「蕉」の字は、師である蕉雨から１字をとったものです。その後明治32年（1899）に上京し、東京美術学校（現東京芸術大学）にて日本画を教えていた橋本雅邦に師事、狩野派の筆法といった伝統的な描き方から、当時生み出された線を明確に描かない朦朧体といった技法などを学び、画家としての技量を高めていきました。

美術学校を卒業した蕉琴が、次なる画業の地として選んだのはインドでした。折しも当時のインドを代表する詩人であり、アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したロビンドロナト・タゴールに歓待され、各地を巡って見聞を深めました。また、カルカッタの官立美術学校では日本画の講師として教壇にも立ち、同時にインド美術から影響を受けた作品を手掛けるようになりました。

帰国した蕉琴は、風景スケッチを繰り返し構図や画法を問い直すことで、さらに自身の絵画を確立させていきます。こうした厳しい修行の果てに出品した「林の中から」は、美術展にて高く評価され、以後文展や帝展といった栄えある展覧会の常連となり、

日本画家としての確固とした地位を確立していきました。大正15年（1926）には帝展の委員に就任し、のちに審査委員を務めました。

また、後進の指導にも熱心でした。故郷である福島県で活動する画家たちを集め、福陽美術会を結成して東京や福島県内で展覧会を行ったり、戦後は福島県総合美術展覧会（県展）の創設に奔走するなど、福島県における美術界の発展に尽力しました。

蕉琴の作品は、滑らかな色使いや絵の細部まで実にこと細やかに描かれることが特徴で、特に花鳥画など生き物を描くことを得意としました。出身地である棚倉でも、宇迦神社の絵馬や山本不動尊鐘楼の天井画などを手掛けており、作品を目にすることができます。

蕉琴は昭和38年（1963）、83歳の生涯を閉じました。馬場都々古別神社境内には「蕉琴先生筆塚」と刻された石碑が建ち、彼の偉業を偲ばせています。

19 聖護院道興（1430～1527）

聖護院道興は、八槻都々古別神社が属した本山派修験道の総本山である、京都の聖護院の住職を務めた室町時代の僧侶です。

室町時代以降、日本における修験道は聖護院率いる本山派と、京都の三宝院を総本山とする当山派の２大組織に分かれおり、互いに正当性を主張して対立していました。こうした中で、道興は自ら率いる本山派に属する寺院の視察や組織強化のため東国を巡る旅に出発します。その過程を記した『廻国雑記』（1486～87）によれば、白河へやってきた道興は八槻都々古別神社の宮司であり、同時に修験組織を束ねていた八槻別当のもとを訪ね、歌を詠んだことが分かります。この折に詠んだ「梓弓」の歌を記したものが、八槻都々古別神社に伝わる短冊であり、県指定重要文化財に指定されています。

20 高山彦九郎（1747～1793）

高山彦九郎は、江戸時代後期に活躍した思想家で、蒲生君平や林子平とともに、

「寛政の三奇人」と呼ばれました。奇人とは変人の意味ではなく、優れた人物という意味です。

彦九郎は上野国（群馬県）で生まれ育ち、若くして地元の学問所で陽明学などの思想や教えに触れ、また江戸や京都で学ぶ機会を得ると数々の思想家と出会い、次第に尊王思想に傾倒していったとされています。

折しもこの頃、30万人ともいわれる死者を出した天明の大飢饉や、近海に出没し始めた外国船への対応をめぐり、幕府に対する不満が各地で募っていました。こうした時代背景もあって、幕府に反感を持つ京都の公家や、のちの尊王攘夷運動の中心となる水戸（茨城県）の学者らとも交流するなど、全国的に活動する思想家として知られていきました。

しかし、反幕府ともとれる天皇家をトップに据えた考え方を推し進めようとする彦九郎は、江戸幕府から危険人物と見なされていきました。監視が強まっていくことを恐れた彦九郎は、寛政５年（1793）に筑後国（福岡県）で自ら命を断ち28年の遊歴生活を終えました。

全国各地を回った彦九郎は、棚倉の地も訪れたという記録が残っています。

21 有井諸九尼（1714～1781）

有井諸九尼は江戸時代中期に活躍した俳人です。

諸九尼は本名を永松とみといい、筑後国（福岡県）の村長の家に生まれ育ちました。彼女もまた別の村長に嫁ぎましたが夫婦仲は冷えていたらしく、やがて知り合った俳諧師の有井湖白とともに駆け落ちし故郷を去ったという波乱の経歴を持っています。２人は京都で九十九庵という小さな家を構え、多くの俳人と交流して俳句の腕を上げていったといいます。湖白の死後は出家して尼となり、日本全国を旅して数多くの俳句を詠みました。

諸九尼は松尾芭蕉の『奥の細道』の世界に憧れて、自身も東北を巡りました。その時の旅について記されているのが明和９年（1772）に書かれた紀行文『秋風の記』で、この行程には彼女が棚倉城下の宿で一晩を過ごした様子が描かれています。

	1775	安永4	蓮家寺山門が建築される（↓26ｐ）。	
	—	小笠原長堯の代	小笠原騒動（↓43ｐ）	
	—	天保	松平康爵、大部屋稲荷神社を建立。（↓21ｐ）	
	1864	元治元	天狗党の志士を供養するため三界万霊塔が建立される。（↓30ｐ）。	天狗党の乱。禁門の変。
	1868	慶応4（明治元）	棚倉藩、奥羽越列藩同盟に参加し、阿部内膳を総指揮とする十六ささげ隊が奮戦（↓53ｐ）。6月24日、板垣退助に率いられた新政府軍により棚倉城が落城する。（↓54ｐ）	戊辰戦争開始。鳥羽・伏見の戦い。
	1869	明治2	阿部正功、棚倉藩知事となる。藩校修道館を設置。（↓55ｐ）蓮家寺火災（↓26ｐ）	戊辰戦争終結。版籍奉還。
明治時代	1871	明治4	7月、棚倉藩が廃され棚倉県が置かれる。10月、棚倉県が平県に編入され、藩校修道館が廃止に。	廃藩置県。
	1875	明治8	西郷頼母、馬場都々古別神社の宮司を務める。（↓54ｐ）棚倉城内の木が払い下げられる。	元老院・大審院が設置される。立憲政体樹立の詔。樺太・千島交換条約。江華島事件。
	1883	明治16	稲垣千頴が東京師範学校の教諭になる。（↓55ｐ）	
	1907	明治40	東白川養蚕学校創立。町民有志により棚倉陶磁器製作所が設立（↓37ｐ）。	
	1930	昭和5	小川芋銭が玉室宗珀の碑文を作成する。（↓50ｐ）	
昭和時代	1940	昭和15	棚倉大火。	日独伊三国同盟成立。大政翼賛会。
	1955	昭和30	町村合併促進法に基づき、棚倉町、社川村、高野村、近津・山岡組合村の1町3ヶ村が合併し、新町名を「棚倉町」とする。	砂川事件。社会党統一。

戦国時代	5537～1540	天文6～天文9	この頃、八槻都々古別神社の大般若経が成立したとされる。（↓19ｐ）
安土桃山時代	1574	天正2	佐竹義重が赤館を攻略する。（↓51ｐ）
	1594	文禄3	佐竹義宣が馬場都々古別神社の本殿を再建する。（↓51ｐ）
	1606	慶長11	立花宗茂が赤館城主となる。（↓49ｐ）
	1613	慶長18	高橋元種が延岡藩を改易され、棚倉藩に預けられる。（↓29ｐ）
	1620	元和6	立花家臣の十時連貞、愛宕神社を造営したと伝わる。（↓21ｐ）
	1623	元和9	お枡明神の枡送りが始まると伝わる。（↓14ｐ）
江戸時代	1624	寛永元	丹羽長重が馬場都々古別神社の地に、棚倉城（現国史跡）の築城を検討する。（↓6ｐ）
	1629	寛永6	玉室宗珀が棚倉へ京都から流罪となり、内藤信照が町内光徳寺に迎える。（↓49ｐ）
	1647	正保4	内藤信照が蓮家寺に銅鐘を寄進する。（↓25ｐ）
	1672	寛文12	寛文の大火。蓮家寺をはじめ多数の家屋が焼ける。
	1673	寛文13	徳川光圀が八溝山を訪れる。（↓31ｐ）
	1689	元禄2	松波勘十郎が江戸から棚倉へ派遣され、財政改革に着手する。（↓52ｐ）
	1701	元禄14	内藤弐信、宇迦神社の本殿を造営。（↓10ｐ）
	1707	宝永4	太田資晴、長久寺を建立。棚倉城の南門を寄進。（↓26ｐ）
	1733	享保18	松平武元、蓮家寺に露大仏を建立。
	1772	明和9	

戦国時代	1574	佐竹義重が白川全領を征服。
江戸時代	1624	スペイン船の来航禁止。
	1629	紫衣事件。
	1673	分地制限令。
	1772	有井諸九尼が『秋風の記』を記す。（↓59ｐ）

	1087	寛治元	源義家が馬場都々古別神社に鎧と太刀を奉納する。（→13p）
	—		このころ、棚倉町域は白河郡から分離した高野郡（入野・常世・高野・依上の四郷）に属する。郡全体が都々古別神社の神領か。
鎌倉時代	鎌倉時代はじめ		このころ、八槻都々古別神社蔵の銅造十一面観音菩薩座像が造られる。（→20p）
	1189	文治5	源義経家臣の鈴木重家、尾滝山に自身の持っていた石仏を祀る。（→22p）
	1234	天福2	八槻都々古別神社蔵の木造十一面観音立像が造られる。（→16p）
	1309	延慶2	富岡地区に町内最古の板碑（石造供養塔）が造立される。（→31p）
	1338	暦応元（延元3）	新田義貞の妻・勾当内侍、棚倉にたどり着く。（→29p）
			新田義貞戦死。
南北朝時代	1369	応安2	蓮台寺所蔵の銅造地蔵菩薩立像が造られる。（→28p）
	14世紀後半		八槻都々古別神社蔵の銅造観音菩薩立像が造られる。（→20p）
室町時代	1411	応永18	白川満朝が八槻都々古別神社に銅鉢を寄進する。（→16p）
	1457	康正3	八槻都々古別神社が岩城氏より、上田（いわき市植田）の地を譲られる。
	1465	寛正6	蓮台寺が尊瑜僧都により創建されたと伝わる。（→28p）
	1469	文明元	常隆寺が八溝山の麓から現在地に移転したと伝わる。（→27p）
	1487	文明19	聖護院道興が諸国の巡行中に、八槻都々古別神社の別当宅に滞在する。（→58p）
	1502	文亀2	八槻都々古別神社別当の良賢が、銅製釣燈籠を同社に寄進する。（→18p）

年表

時代	西暦	年號(南朝年号)	棚倉町に関するできごと	県内・全国のできごと
旧石器時代	後期		胡麻沢遺跡	岩宿遺跡（群馬県）
縄文時代	早期		中丸遺跡、日向前A・B遺跡	竹ノ内遺跡（いわき市）
	前期		日向前B遺跡	
	中期		松並平遺跡（→36ｐ）、高渡遺跡（→33ｐ）	三内丸山遺跡（青森県）、宮畑遺跡（福島市）
	後期		崖ノ上遺跡（→33ｐ）、高渡遺跡	大森貝塚（東京都）
	晩期		崖ノ上遺跡、古塙遺跡	亀ヶ岡遺跡（青森県）
弥生時代	中期		中萩平遺跡、崖ノ上遺跡	吉野ヶ里遺跡（佐賀県）、鳥内遺跡（石川町）、天神原遺跡（楢葉町）
	後期	1世紀頃	久保前遺跡	登呂遺跡（静岡県）、天王山遺跡（白河市）
古墳時代	4世紀頃		森ノ上遺跡	大塚山古墳（会津若松市）、大安場古墳群（郡山市）
	5世紀頃		山梨子山遺跡	
	6世紀頃		胡麻沢古墳・塚原古墳群・堤古墳群（→34ｐ）	
	7世紀頃		豊岡横穴古墳群	
奈良時代	724～729	神亀年間	宇迦神社の社殿が創建される。（→10ｐ）	陸奥国に多賀城を設置。
	737	天平9	行基によって常隆寺が造営したと伝わる。	
奈良・平安時代	—	8世紀～10世紀	松並平遺跡の集落が繁栄する。	
平安時代	807	大同2	坂上田村麻呂、建鉾山（白河市表郷地区）の神を現在の棚倉城跡に遷し、馬場都々古別神社の社殿を造営したと伝わる。（→11ｐ）	弘法大師（空海）が東北行脚の旅に出る。（→24ｐ）
	927	延長5	『延喜式神名帳』に、名神大社として都都古和気神社が載る。（→15ｐ）	
	—	9世紀後半～10世紀中頃	流廃寺（現国史跡）が営まれ、金銀象嵌鉄剣が製作される。（→36ｐ）	
	1083	永保3		源義家が清原氏の内紛に介入し、後三年合戦おこる。（→48ｐ）

【参考文献】

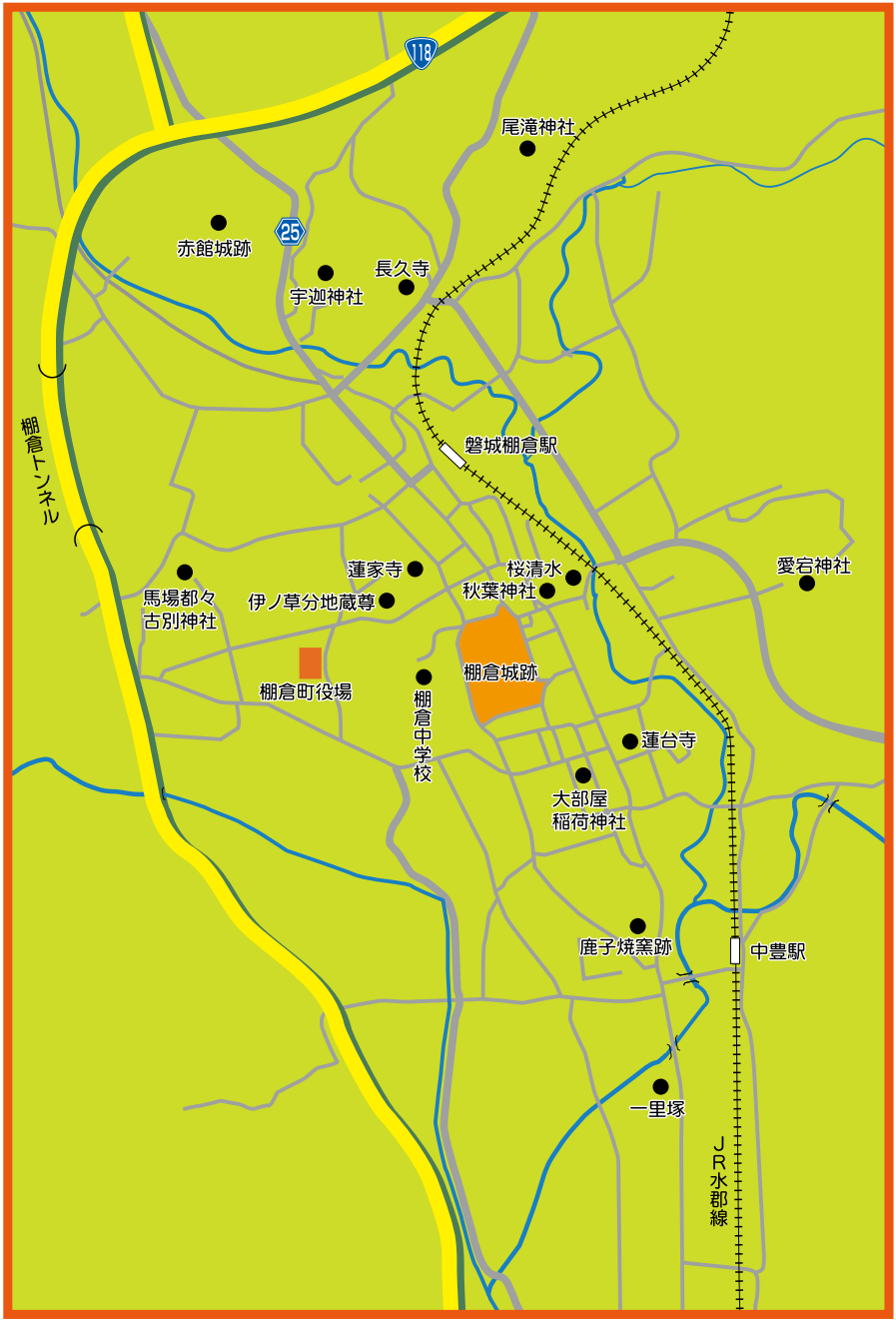
・秋山高志2000「水戸藩士の八溝山登山」江原忠昭ほか編『耕人』6号　耕人社 p.3～12
・朝尾直弘ほか編1996『角川 新版日本史辞典』　角川書店
・浅川町史編纂委員会編1999『浅川町史』1巻 通史・各論編　福島県浅川町
・荒川紘2005「寛政の三奇人と遊歴の時代」『人文論集』55巻2号　静岡大学文理学部 p.1～41
・伊藤孝博2006『江戸「東北旅日記」案内』　無明舎出版
・稲賀敬二ほか監修2006『新版　新訂総合国語便覧』　第一学習社
・近江俊秀2014『日本の古代道路　道路は社会をどう変えたのか』　角川出版社
・金沢春友1955『水戸天狗党遺聞』　富貴書房
・金沢春友1974『水戸天狗党と久慈川舟運』　柏書房
・工藤寛正2008『江戸時代全大名家事典』　東京堂出版
・鈴木啓2009『南奥の古代通史』歴史春秋社
・鈴木三郎1987『八溝山-霊峰八溝山と林業-』　筑波書林
・鈴木三郎1988『天狗党異聞-田中隊の八溝路とその終焉-』　筑波書林
・高橋崇1986『坂上田村麻呂』新稿版　吉川弘文館
・棚倉史談会編『棚倉史談』1～10号　棚倉史談会
・棚倉町教育委員会編『棚倉町史』1～6巻・別巻1～3巻　棚倉町
・棚倉町教育委員会編『八槻都々古別神社の御田植』　棚倉町教育委員会
・棚倉町教育委員会編1981『田山花袋(録弥)棚倉百勝詠歌集』　社会教育課町史編さん係
・棚倉町教育委員会編1985『たなぐらの文化財』　棚倉町教育委員会
・棚倉町教育委員会編1991『行政区ガイドブック』　棚倉町教育委員会社会教育課
・棚倉町教育委員会編1997『崖ノ上遺跡』　棚倉町教育委員会
・棚倉町教育委員会編2004『棚倉町の板碑』　福島県棚倉町教育委員会
・棚倉町教育委員会編2013『シンポジウム 棚倉藩と都々古別神社　資料集』
・棚倉町教育委員会編2014『流廃寺跡国史跡指定記念 記念講演会　資料集』
・棚倉町教育委員会社会教育課編『棚倉城と棚倉藩』パンフレット
・棚倉町教育委員会社会教育課編1987『棚倉の民話と伝説』その3　棚倉町教育委員会社会教育課
・棚倉町伝統文化活性化実行委員会編2013『棚倉藩と都々古別神社』棚倉町伝統文化活性化実行委員会
・棚倉町ふるさと興し会編1989『棚倉のお殿さま』ふるさとコミック棚倉Ⅱ　棚倉町

ふるさと興し会
・町史編さん係編1979『棚倉の民話と伝説』　棚倉町教育委員会社会教育課町史編さん係
・町史編さん係編1982『棚倉の民話と伝説』その2　棚倉町教育委員会社会教育課町史編さん係
・東北歴史博物館編2000『特別展　東北地方の仮面』　東北歴史博物館
・栃木県立なす風土記の丘資料館編2013『平成25年度 栃木県立なす風土記の丘資料館第21回 特別
展図録　われ、西より来たりて那須の地を治める！-地方から古墳文化のはじまりを探る-』　栃木県立
なす風土記の丘資料館
・野口実2012『源義家 天下第一の武勇の士』　山川出版社
・塙町編1986『塙町史』1巻 通史・旧村沿革・民俗　塙町
・濱島正士監修2000『文化財探訪クラブ③　寺院建築』　山川出版社
・福島県教育委員会編1981『福島県の文化財』　福島県教育委員会
・福島県教育委員会編1985『都々古別三社調査報告』福島県立博物館調査報告第11集
・福島県総合緑化センター編1983『緑の文化財』　福島県総合緑化センター
・福島県文化財センター白河館編2012「平成24年度ふくしま里帰り展　ふくしま考古学研究の春暁
-棚倉式土器の発見・新地貝塚の発掘-」パンフレット
・福島県立博物館編1989『企画展　中通りの仏像』シリーズ福島の仏像②　福島県立博物館
・福島県立美術館ほか編1998『反骨の画家　勝田蕉琴展　図録』　福島県立美術館
・丸山美季2011「阿部正功の生涯と学問－人類学・土俗学・考古学－」『学習院大学史料館紀要』17号
学習院大学史料館
・横浜市歴史博物館編2012『畠山重忠－横浜・二俣川に散った武蔵武士－』　横浜市ふるさと歴史財団
・「「紫衣事件」で流罪 玉室宗珀の居宅跡　碑文は芋銭の書」『朝日新聞』朝刊　2010年12月7日
・「棚倉町指定有形文化財　阿部正備茶室」パンフレット
・「都々古和氣神社」パンフレット
・「大泉山寶池院　蓮家寺」パンフレット
・「山本不動尊」パンフレット

棚倉町文化財マップ

町全体図

棚倉町中心部


118
25
尾滝神社
赤館城跡
長久寺
宇迦神社
棚倉トンネル
磐城棚倉駅
蓮家寺
桜清水
秋葉神社
伊ノ草分地蔵尊
馬場都々
古別神社
愛宕神社
棚倉城跡
棚倉町役場
棚倉中学校
蓮台寺
大部屋
稲荷神社
鹿子焼窯跡
中豊駅
一里塚
JR水郡線

東北の小京都　たなぐら

棚倉町歴史虎ノ巻

令和３年２月発行

発行　棚倉町
〒963-6192
福島県東白川郡棚倉町大字棚倉字中居野33
TEL.0247-33-2111
http://www.town.tanagura.fukushima.jp/
監修　棚倉町教育委員会
印刷　㈲ワタベ印刷所

立花家家紋
杏葉紋（ぎょうようもん）

丹羽家家紋
直違紋（すじかいもん）